

咲- Saki- 至高を目
指す魔神

神田瑞樹

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

21世紀。世界の麻雀競技人口は1億人を突破し、日本でも大規模な全国大会が行われていた。そんな中、麻雀界に一人の魔神が降臨する。これは、無意味と知りながらも過去に囚われ続ける少年の物語。

2015年1月17日 少し改訂しました。

※自分のブログ『つぶやくままに』と同時掲載することにしました。

<http://blog.livedoor.jp/bekobeko21/>

目次

プロローグ	1
第一話	4
第二話	23
第三話	48
第四話	63
第五話	78
第六話	92
第七話	106
第八話	124
第九話	140
第十話	159

プロローグ

プロローグ

……なあ、麻雀ってなんだと思う？

その問いかけに少年は動きを止めた。

幼い少年だった。

低い身長に赤みを帯びたふっくらとした頬。

どうサバを読んで十にも満たないであろうその少年は一瞬何を言われたのか理解できないと言った風に目を真ん丸にし、そして我に返ると同時に小さな口一杯に含んでいたフグ刺しを急いで胃におし込んだ。

「っっ!!」

慌てすぎて上手く飲み込めず、むせそうになるのを我慢して水で何とか流し込む。

目尻に涙が浮かぶがそんなことを気にしている余裕はなかった。

少年は驚きを含んだ目を目の前に座る中年の男性へと向けた。

それまでの人生の壮絶さを物語るかのような深い皺と真っ白な髪。

胸元が大きく開いたジャケットの下から見える派手なトラ柄のシャツは否が応でも

人の目を引く。

くいつと安い日本酒を煽る姿を見ながら、今日は珍しいことが続く日だと少年は思った。

こうして食事に連れてきてくれることでさえ稀であるのに、普段ならばまずしないであろう質問まで投げかけられた。

奇妙だと思わないわけではなかったが、そんな些細な疑念を気にしないほどに歓喜の嵐が少年の中で吹き荒れていた。

少年は浮かれた気持ち必死に抑えつけながら、答えた。

「麻雀は鏡だと」

捨て牌には培われた思考が映り、自模には生まれ持った天運が宿る。

故に麻雀とは人の本質を映し出す鏡。

そう言うとき男性はなるほどと小さく溢し、また酒を煽った。

否定するわけでも、肯定するわけでもない。

だから思わず、少年は尋ねていた。

「あなたは思うんですか」と。

知りたかった。裏の世界において天才の名を欲しいままにした人が、初めて負けというものを味わせてくれた人が麻雀をどう捉えているのかを。

長い沈黙。

いや実際の時間になおせばきつと一分にも満たなかつたのであろうが、その何倍にも少年は感じていた。

ゆつくりと、男性は空になつたお猪口を置く。

そして深く皺の入つた頬を僅かに緩ませ、

“ギャンブルだ”

そう、呟いた。

麻雀とはギャンブルだと。

それ以上でもなければ、それ以下でもない。

単純にして明快。

至極当たり前のことが、何故か妙に少年の心に残つた。

第一話

I

5月下旬、長野県某所。

初夏を迎え、並木道の桜が緑の葉を生い茂らせつつある頃。

都会では中々目にするのできない自然を色濃く残す通りの一角にそれはあった。

雀荘『roof-top』。

世にも珍しいメイドがいる雀荘として地元住民に知られるこの店は、ノーレートという気安さもあつてか、ネット麻雀が普及しても尚一定の客層をしつかりと確保し続けている。

さほど広くない店内には5台の自動卓が設置され、それぞれでの卓では思い思いの熱戦が繰り広げられている。

とは言え、ここにいるのは麻雀をギャンブルではなく将棋や囲碁の様に一つの遊びとして捉えている者が殆ど。それぞれが互いに顔馴染ということもあつて、その空気は一般の雀荘に比べればごく和やかなもので、麻雀を打ちながら会話に花を咲かせている。

地元住民の憩いの場。

それがここでの日常。

しかし、この日だけは少し様子が異なった。

壁際3つの雀卓は普段と変わらない。

室内の中央。

番号にして4と数字が振られた卓が、ピンと張りつめられた空気に覆われていた。



「ロン」

張ったわけではない、されど力の籠った声が空気を揺らす。

えっと上家から聞こえてくる驚きの声を尻目に、彼女は静かに牌を倒した。

「断么九・ドラ2………3翻40符の1本場で5500」

「なっ！」

「半荘終了。これで4連続、私がトップね」

ふふつと女性が意味ありげな笑みを浮かべると、声を上げた少女はきつく唇を噛みしめた。偶然ではなく、またしても回った所を狙われた。

しつかりそう理解していることを、エプロンドレスを握りしめる両手が物語っている。

……さて

これでトータルスコアは+119。

半荘4回、ウマなしの勝負ではまあまあと言った所。

……もつとも、この二人はそう思っていないようだけど

ちらりと、女性は左右に座るメイド服に身を包んだ少女達の顔色をうかがう。

そこにあつたのは困惑と驚愕、そしてある種の恐れ。

そんな強張った顔で自分を見つめる者の心境を読み解くことなど、長年闘牌の世界に身を投じてきた彼女にとっては相手の待ち牌を見抜くよりもはるかに簡単な作業だった。

—— いったい何者？

今の二人の気持ちを代弁するとしたらこんな所だろうか。

ただわかってしまうがゆえに、少々思う所がないわけでもない。

……それなりに顔が売れている自信はあつたんだが。

藤田靖子。

年齢不詳。

職業、"プロ"雀士。

専門誌とは言えちよくちよく雑誌にも顔を出しているし、最近ではお菓子のおまけの

カードにもなった。麻雀を知らない一般人ならともかく、麻雀に携わる人間が自分を知らないというのは中々に靖子の心に刺さるものがあつた。

……しかし、どうしたものか。

新しく入ってきた部員二人をへこませてくれと顔馴染の少女から靖子の元に電話があつたのがつい一昨日のこと。

麻雀部、それも久の後輩なら自分のことは知っていると勝手に思い込んでいただけに（特に片方は同じ雑誌に載っていたこともあるだけに）、あなたは誰なんですかという反応は正直予想外。

別に口止めされているわけでもないのだから教えても問題はないのだが、靖子自身の口からプロだと名乗るのは何となく決まりが悪い。

表面上は澄ました顔、内心少し困りながら靖子が煙管に口をつけていると、

「藤田さんはプロなんじゃよ」

アツシボ（アツいおしぼりの略称）を交換に来た少し癖つ毛のメイド——染谷まここが救いの手を差し伸べた。

「実業団時代からまくりの女王と呼ばれとつて、プロの中でも有名な雀士なんよ」

「プロ雀士……」

「じゃけえ」

……ナイスタイミングだ。

心の中で賞賛しながら、靖子はふっと煙を吐き出した。

「そっか。プロじゃ仕方ないよね……」

下家に座る茶髪のショートカットの少女はプロという言葉に驚くも、どこかほっとした様な安堵の表情を見せた。一方、そんな彼女の言葉にピクリと反応した人物がいることを靖子は見逃さなかった。

「そうだよね。高校生の私たちがプロに負けるのは……当たり…前だよね」
「つつ!」

上家から椅子を跳ね除ける音が聞こえると同時、荒々しい音と衝撃が雀卓を揺らした。

「当たり前なんかじゃないですよっ!!」

「は、原村さん?」

「なんで諦めるんですかっ!？」

興奮と怒りで赤くしながら、スタイルのいい(特にある一部分が)少女——原村和は声を荒げた。対する少女はびくびくと体を小動物の様に体を震わせ、

「だ、だって……相手は、その、プロだから……」

「プロだから負けてもいいと? そんなの、言い訳でしかないですよ! プロだからな

んだっていうんですかつ!」

……私の前で随分ないいようだな。

恐らくは無意識の内に出た言葉だろう。

思わず苦笑が浮かぶが、靖子の心に不快の念はなかった。

いつでもどこでもどんな分野でも、最後に勝つのは諦めない者達である——と

は言わない。青臭い考えを持っていた学生の頃とは違うのだ。

どれだけ努力しても、どれだけ諦めなくても負ける時は負ける。

特に麻雀ならなおさら。

そのことを靖子はこの数年で嫌と言うほど身に染みている。

しかし、それでもなお思ってしまうのだ。

……諦めなければ活路が見えるかもしれないというのは、いささか非現実的か？

ただ、感情を見せないデジタルな打ち方をしていた原村和がここまで声を荒げるとは正直意外だった。

……少し試してみるか。

頼まれごとからは少し外れるかもしれないが、まあ問題ないだろうと勝手に結論付ける。
これを聞いた後、一体二人はどんな反応をするのかと靖子はそつと口元に弧を描い

た。

「——去年プロアマの親善試合があつてね。半荘18回を戦つて私は2位だつた」
いきなり何をという視線は無視。

まさか自慢ですかというジト目も黙殺。

「優勝したのは、当時15歳の高校生——龍門渕高校の天江衣」

虚を突かれたとは正にこのことか。

二人は言われた言葉の意味を理解し、

「プロに勝つたのが……高校……生？ 私と同じ？」

「

龍門渕つて確か、県予選に出てくる相手じゃ……」

「あら？ あなた達も県予選に出るの？」

本当は久から聞いていたのだが、勿論そんなことは言わない。

「残念ね。わかっていると思うけど」

——絶対に勝てないわよ、あなた達

「「っっ!!」」

冷たい言葉に片や俯き、片や拳を握りしめた。

これで終わるようなら、所詮はそこまでだったということ。

……だがそれでいいのかもしれないな。

昨年の県予選で見せた天江衣の圧倒的な強さ——というには、オカルトか呪い染みていた気がするが——の前に何人もその学生が戦意喪失し、中には麻雀を辞めた者もいると聞く。

それを味わうぐらいなら、戦わない方が賢明なのかもしれない。

……毎年一人か二人現れるんだよな。

こんなことを記者に言えば恐らくは一笑にふせられるだろう。

靖子とて、出来れば信じたくはない。

しかし、そうとしか思えない人物がいることもまた事実。

そう。

——牌に愛された人間というものが

……一昨年は西東京の宮永照、去年は鹿児島島の神代、そして天江衣。

どいつもこいつも常識では量りえない何かを秘めている。

今年もそういつた常識に囚われない打ち手が現れるかもしれない。

ちらりと、靖子は視線だけを下家で俯く少女へと向けた。

……最初の半荘で見せた『西』大明積からの嶺上開花。

ドラ1の聴牌形とは言え、役がない地獄単騎のあの形からなら面前でより良い形を目

指すのが常道。

だが、彼女は副露した。

ドラだったわけでもなければ、翻牌だったわけでもない。

どう見ても無駄な大明槓。

役を失くし、ドラが乗ることだけを頼みにした初心者の選択。

……が、実際にあの娘はあがった

王牌から最後の『九萬』を引いて。

嶺上開花、ドラ1。

偶然と言つてしまえばそれまでだろう。

しかし、嶺上開花を成立させた時に見せたあの表情。

……あれは偶然和了れたという顔じゃなかった。

至極当然。

まるで嶺上牌が当たり牌だとわかっていたかのよう。

宮永咲。名字からすれば、あの宮永照と何らかの繋がりがあるかもしれない。

もしかしたらくるかも知れない。

そう思わせる何かを靖子はあの嶺上開花から感じ取っていた。

……とは言え、まだまだ私の敵じゃないが。

原村和も含めた両人とも光るモノは感じるが、ただそれだけ。

原村和は集中しきれていないのか打ち筋にところどころ粗が目立ち、宮永咲は場の空気に吞まれて自分の麻雀が打てていない。

そうなるように靖子が仕向けたとは言え、それでも余りに脆すぎる。

県予選まであと10日。

それまでにどこまで修正できるやらと考える靖子の脳裏に、ふと別のことが浮かんだ。

……そういえば、「あれ」も今年で高校一年だったな。

昨年、突如として中学麻雀界に現れた怪物。

基本中学麻雀、特に関わりのない男子部門など殆ど興味を抱かない靖子が唯一その名を覚えた——否、刻み込まされた生徒。

夏のインターミドルを最後に音沙汰がなくなったため現在の消息がつかめないが、そのまま進学していれば確か今年で高校一年のはず。

強豪校に入っていれば嫌でも噂になるはずなので、やはり中学時代同様どこかの無名校にでもいるのかもしれない。

……しかしこの時期になっても高校の名前さえ聞かないのはいささか妙だな。

容姿の端麗さとマスコミへの露出度の差から一般の認知度では女子部門王者である

原村和に劣るとは言え、それでも麻雀界であれだけ噂されたのだ。

例えば麻雀部のない高校に進んだにしろ、地元である東京の高校であれば行方をリークしている雑誌が一つぐらいあってもおかしくない。

だが事実としてそんな話はどこの週刊誌にも載っていない。

……もしや東京から離れたか？

だとすれば向かったのは激戦区の大阪か、あるいは独特の打ち手がひしめく沖縄か、それともいつそ世界を目指しての海外か。

最早完全に当初の路線から脱線しつつある靖子の思考の渦を止めたのは、これまで会話に参加していなかった対面の中年男性だった。

「藤田さん」

「うん？ ああ、長い間中断していてすみません。確か次でラス半でしたね？」

頼まれごとは果たした。

これまでは両面二人からの直撃を主として狙っていたが、もう自由に打っていいだろう。

靖子はサイコロのスイッチに手を伸ばしかけるが、少し慌てた声がそれを遮った。

「いやそうじゃないんですよ」

「はい？」

話を聞くところによると、何でも家族から今すぐ帰ってこいとのメールがあつたらしい（その顔にはやけに哀愁が漂っていたが）。

なので、突然で悪いがここで抜けるとのこと。

突抜けはマナー違反だが、金を賭けているならまだしもここは純粹に麻雀を楽しむノーレートの場合。申し訳なさそうに頭を下げていることもあり、お疲れ様ですと靖子は小さく頭を下げた。

男性はほつと安堵の息をつくと立ち上がり卓を後にした。

「じゃあ、お疲れ」

「お疲れ様です……宮永さん！」

「あつ。お、お疲れ様でした！」

自分の立場を忘れていたのだろう。

せかさされる形で小さなメイドは慌てて頭を下げた。

そんなやり取りを視界に収めつつ、靖子は頭を捻った。

……さて。どうするか。

目的は果たしたとはいえ、もう一局と意気込んでいた矢先のことだ。

何となく片手落ちの感は否めない。

時間的に見てももう半荘は打ちたいところだが、生憎と他の卓で空いている面子はな

し。

唯一どの卓にもついていないメイドは現在レジの真つ最中の上に、接客のためにも卓に着くことは出来ない。

仕方ない、ここままでにしよう靖子が口を開きかけたその時だった。カランと、入り口につけられた鐘の音が鳴り響く。

「うん？」

先の男性がレジを終えたにしてはいささか早い。

誰か入ってきたのかと自然と靖子の視線は扉に向けられ――

「つつ!?!」

その感覚を一体何と表現すればいいのだろうか。

寒気でも、圧迫感でも、ましてや恐怖でもない。

ただただ言いようのない何か靖子の全身を貫いていく。

……これは

動けない。

まるで体が鉛か鉄にでもなったかのよう。

これに近いものを彼女は知っていた。

自分が自分でなくなるような、遙か天空から見下ろされているようなこの感覚。

そう。三年前、初めて世界トップランカーと戦った時に感じたものと同じ——
「宮永さんっ!？」

「っっ!」

呪縛を解いたのは悲鳴染みた甲高い少女の叫び。

はつと我に返った靖子は、声につられるように下家に目を向けた。

——震えている。

確かに、先程まで打っている時もこの少女は小刻みに体が震えていた。

そのことは靖子とて気付いていた。

だが、これは違う。

幼子の様に赤みを宿していた頬は白魚の様に青白く、目元には隠し切れない大粒の滴。

メイド服に包まれた華奢な肢体が痙攣したかのようにガタガタと大きく震え、まるで雪山で遭難した登山者を思わせた。

……この娘も感じたのか。

それも恐らくは、自分よりもずっと強く。

必死に友人の名を呼ぶ原村和の叫びを耳に入れながら、静かに靖子は肺の空気を入れ替えた。大きく息を吐き出すと共にざわつく心音を落ち着かせ、改めて入ってきた。そ

れ”を見た。

分厚い黒地の学ランに同色のズボンという男子学生の典型的な制服。

帰宅途中だったのか手には平べったい学生鞆が握られている。

タオルを頭から被っているせいで殆ど顔は見えないが、ちらりと隙間から見えた感じでは恐らく十代前半から中盤。背丈はさほど高くなく体も決して大きくはないのだが、不思議と華奢という印象はなかった。

……さつきのはあいつが？

世界トップに感じたのと同種感覚を、プロどころかたかだか学生に覚える。

ありえないと理性が否定するが、雀士としての直感が痛いほどに警告を鳴らしている。

少年は会計を終えて出ていく中年男性と入れ違いになる形でレジに立つメイドに話しかけると、メイドは少年を——正確にはその服を見て困ったように形の良い眉を顰めた。

……まあ。当然か。

日本の法律では雀荘に入ることができるのは18歳以上と法律で決まっている。

麻雀の全国的な普及によって多少形骸化しつつあることは確かだが、それでも法律は法律。いくらノーレートとは言え、制服姿の学生の入店を許可するのは流石に不味い。

……これは追い出されるか。

しかし靖子の予想に反し、一言二言会話をかわすと少年は入り口近くのソファアへと腰を下ろした。

店のことに關しては比較的厳格な対応を取る染谷にしては意外な対応。

あの少年が気になることもあつたのだろう。

思わず靖子は声を上げていた。

「染谷」

「うん？ どうかしました、藤田さん？」

「いいのか？」

音量を抑えて視線をソファアへと向ける。

それで察したのだろう。

まこはああと頷き、

「よくはないんですけど、理由が理由なんで」

「理由？」

「雨宿りゆーやつですよ。どうも急に降り出しよつたみたいで。夕立ちなんですすぐに止むとは思うんですけど、まあ。それまでは」

「なるほどな」

言われてみれば、確かに傘代わりに使ったであろうタオルや制服が薄らと湿り気を持ってるのが見て取れる。この辺りは昔ながらの民家が多く雨宿りできるような場所が少ないため、雨宿りできる場所としてここを選んだのもわからなくはない。

ただ妙に場馴れしている様子が気になるが。

……しかしそうなると、ここで打つのは無理か。

そこにあの少年が麻雀を打てないという考えはない。

彼は間違いなく雀士——それも、超一流の存在だという確信が靖子にはあった。

……出来ることなら一度打つてみたいところだったが。

面子も足りないことだし、是が非にでも戦つてみたいという気持ちはある。

しかし自分はプロ。

自身の欲求にかまけ、店に迷惑をかけるような行為だけは決してしてはならない。

……ここは運がなかったと諦めるか。

悔しいが仕方ない。

だがせめて名前ぐらいは聞いておくかと靖子が席を立とうとしたその時。

ばさりと、少年の頭からタオルが零れ落ちた。

「っっっ！」

それまで白布に隠されていたものが露わになり、靖子は思わず息を呑んだ。

お洒落とは無縁のぎつくばらんに切られた黒髪に、見る者に不快感を抱かせないほどには整った容姿。悪くはないが、かといって特別良いわけでもない。

少し街を歩けば彼より容姿の整った男は幾らでもいる。

だがその顔を見た瞬間に心臓が一際大きく鼓動を打つのを靖子は確かに感じた。

恋——では勿論ない。

年下は趣味じゃないし、そもそも今は男よりも麻雀。だがずつと気になっていたという意味では、ある意味で似たようなものかもしれないなかった。

「……噂をすれば影とはよく言ったものだが、まさかこんな所で出会うことになるのかな」

「なんや？ 藤田さんの知り合いですか？」

「知り合いというほどのものじゃない」

実際、あつちは靖子のことなど知りもしないだろう。

靖子とて、画面越しでは何度となく見ていたが直接会うのはこれが初めて。

それでも見間違えるはずなど無い。

単に顔が似ている者ならば世の中にいくらでもいる。

だがあの眼を——吸い込まれそうな澄んだ瞳を持つ存在が他にいるものか。

「青山……茂喜」

前年度インターミドル男子部門覇者。

様々な記録を塗り替え、遂には競技ルールさえも変えさせるに至った魔物。

その打ち筋を見た者は口を揃えてこう言った。

——魔神、と。

「……染谷」

「はい？」

「少し、頼みがある」

第二話

0

夕暮れ。

それは昼と夜の間を訪れる僅かな時間。

現代においてこそ美しい自然風景の一つとして愛されているが、古来において夕暮れというのは不吉な時間と称されるものだった。

まだ昼と夜が分かれていた時代。

人が生活する明るい昼間から、怪異が蠢く暗い闇の夜へと変貌していくこの時間帯を人々は黄昏時や逢魔時という名を与えて縛り、畏れた。

近代に入って街灯が整備されたことで昼と夜の境界線が入り混じり、時間の均質化が始まると人々の中から夕暮れに対する畏れという概念は薄れていきはした。

しかし、それでも数多くの事故や事件が夕暮れ時に起きる様に、夕暮れがやはり何か不可思議な魔力を持った特別な時間帯であるということに変わりはない（認める認めないは別にしても）。

まあ。何が言いたいのかといえはば。

つまるところ夕暮れには何が起きてても不思議じゃないということ。

例え、天気予報にない雨が「突然」降ろうとも。

例え、雨宿りに選んだ場所が「たまたま」雀荘だったとしても。

例え、その雀荘に「偶然」プロがいたとしても。

決して不思議じゃない。

そう。

例え、魔神が現れようとも。

これは、そんなある夕暮れに起きた物語。

I

カチカチと壁にかけられた時計が時を刻む。

時刻は既に19時を回っていた。

5世代ほど前のエアコンがガーガーと肌寒くなるほどの冷たい吐息を吐き出し、稼働中の古びた自動卓が独特の振動と機械音をまき散らす。

消音の空調設備や最新の自動卓が当然の様に設置された試合会場とは違う、昔ながらのこのレトロな雰囲気や靖子は気に入っていた。

実業団時代から何度となく足を運び、プロになった後も暇を見つけては訪れた。

すつかり慣れきつたはずの場。

だがこの時だけは、その慣れきつた場がまるで異界のように思えた。

靖子は高鳴る鼓動を押さえつける様に愛用の煙管に口をつけ、灰色に濁った煙を吐き出した。味はほとんどしなかつたが、それでもちよつとした精神安定剤の代わりにはなつた。

「始めようか」

「はい」

「……はい」

今度こそは勝つと力の籠つた声と、怯えた様に縮こまつた声。

酷く対照的な二つの返事であつたが、靖子がそれを気にかけることはなかつた。

彼女の意識は正面——対面に座る一人の少年だけに向けられていた。

「……ああ」

眩きにも似た低い了承の声と共に、サイコロが回る。

出た目に従つて仮親が決まり、続いてもう一度サイコロが卓の真ん中で回転する。

……6。私が起家か。

どちらかといえは後半に強い靖子にとっては些か残念な巡り合わせになつたが、こればかりは仕方ない。

細く長い指がスイッチへとかかり、サイコロが三度回転する。

……染谷には随分と無茶を言ったな。

出た目に従い山から手牌を取りながら、靖子は忙しそうに店内を動き回っているメイドに心中で謝罪と、深い感謝の言葉を紡ぐ。

——あいつと打たせてくれないか？

今より数分前、靖子はまことにそう頼んだ。

雀士の模範となるべきプロが未成年禁制の雀荘で制服姿の学生と打つ。

それがプロとして恥ずべき、下手をすればプロ資格を剥奪されかねない行為だというのは重々に理解していた。

連絡先を聞き、日時と場所を改めて打つ。

それこそが絶対的に正しい選択。

もしもこれが別の誰かだったなら、きつと靖子はその“大人の対応”をしただろう（事実、一度はそうしようとした）。

だが、

……相手はあの青山茂喜だ。

この半年、ずっと打ってみたいと思いつけていた魔神。

それが今この瞬間、目の前に現れたのだ。

訪れるかどうか定かではない。次などに任せられようはずもない。

勿論、まこにしてみればそんな靖子の心情など知る由もないし、仮に知っていたとしても店を危険に晒すような許可など与えられる筈もない。

当然の如く断るが靖子は引かなかつた。

普通の客がこんな反応を取れば店を追い出している所だが、靖子は実業団時代から鼻にしてもらっている上客の上に今回は後輩二人の面倒も見てもらっている。

結局、靖子の熱意に押される形でまこが折れ、相手側の了承を取ることと半荘一回の条件付きで渋々対局を認める運びとなつた。

……勝負は半荘一回。

靖子の頼みに青山は多少考え込むような仕草を見せたものの、こうして一緒に卓をかこつている様に結局は承諾した。

半荘一回での勝負。

普通ならばたつたそれだけで強い弱いがわかるはずがない。

運九割、実力一割との言葉ある様に麻雀というのは非常に運の要素が強いゲーム。

どれだけ待ちのいい五面張を聴牌したところで、地獄単騎に負けることもある。

たつた半荘一回程度であれば必ずぶの素人がプロに大勝ちすることも大いにあり得る。

それが麻雀。

だが、

……問題ない。

世界に目を向ければ半荘一回のみで勝負が決まる大会などざらにある。

そんな場において、「運悪く」負けたなんて言い訳は通じない。

どんな状況、どんな場においても勝つてこそ一流。

そして靖子は、その数少ない一流に属する人間であつた。

北家にあたる上家の宮永咲が山から最後の手牌を引き終わり、各人がそれぞれ手元に臥せた牌を開く。見易いように理牌された手牌に靖子は表情には出さないものの、内心で手応えを感じていた。

……悪くない。

タンピンドラが見える三向聴。

比較的早く、またある程度の点数を期待できる好形。

手によつては「見」に回ろうかとも思ったが、流すには惜しい手が最初からやつてきた。

幾らかの可能性を考慮に入れつつ靖子は不要牌を切り出す。

その後、順に従い各々が番を消化していくが特に動きはない。

静かな立ち上がり。

そして特に動きもなく迎えた第八巡。

靖子はいささか薄いかと思われていた嵌（六索）を引き入れ、聴牌。

……張った。

（二萬）を切つてリーチをかければ最低でも11600。

さらにツモと裏が乗れば親ツパネ。

まだ東一局。特にこれ以上伸びそうな手でもないし、他家の出鼻をくじくという意味でもここは素直にリーチをかける場面。

ちらりと、靖子は両隣の河に視線を巡らせる。

……上家はまだ幺九牌整理、下家も見えた感じでは手が遅い。

リーチをかければ恐らく二人とも降りるだろうが、待ちの広いこの手を最後までかわし切れるとは思えない。

両面二人は問題ないことを確認し、靖子は問題の個所に意識を置く。

……一見すれば平凡な捨て牌。

対面の河に浮かぶ七つの牌。

〔北〕〔西〕〔二筒〕〔七索〕〔二萬〕〔北〕〔六筒〕。

字牌整理から始まって端を落としていく典型的な断幺九狙いの打ち筋。

最後の〔六筒〕が手出しだということには些かの注意が必要だが、その前二つがツモ

切りということを考えれば大して手が進んでいないように見える。

……断么九狙い。しかも〔二萬〕という壁がある以上、十中八九この〔一萬〕は通る。本来ならば考慮にすら値しない場面。

まっすぐに行く。

ただそれだけで良いというのに——何かが妙に引っかかった。

……素直に行き過ぎている。

確かに麻雀の常識で考えればこのような展開などいくらかでもある。

しかもまだ始まったばかりの東一局。

普通に考えれば疑心暗鬼もいいところ。

だが、何かが妙に引っかかる。

それは数多の常識外の打ち手と闘う中で培われた、プロとしての勘。

牌効率を重視するデジタル打ちの観点から見ればオカルトもいい所だが、その「オカルト」のお蔭でここまで来れたのもまた事実。

しばしの長考の後、靖子は手牌の中から一つの牌を選択した。

〔八筒〕。

靖子、聴牌にとらない雀頭崩し。

無論他家がそんな奇妙な選択を知りようはずもない。

何事もなく次順ののどかが靖子に合わせる形で牌を切り、すぐさま番は青山へと移る。

すつと青山の手が山へとのびる。

そしてゆつくりと牌をツモリ——そのまま手牌を倒した。

「ツモ」

感情の色が見えない、されどどこか力を感じさせる宣言が靖子の耳を打つ。

「ツモ・チャンタ・中・ドラ」……」

五翻の満貫。親被りのために手元の引き出しから4千点分の点棒を取り出しながら、靖子は目を細めた。

……断么九を匂わせてのチャンタ。

張つてないと思つていたら実は張つていたというのは麻雀でよくあることだが、それでも僅か八巡のあの捨て牌からチャンタなどと誰が思おうか。

事実、のどかは全く予想していなかった和了に微かだが息を呑んでいる。

……鮮やかなまでの迷彩。

運がよかつたと言えはそれまでだが、それでも倒された手牌と捨て牌を見る限り一切の失着なしに最良のルートを的確に突き進んでいる。

仮に靖子が同じ立場にいたとして、同じように打てたかどうか。

……だが、注目すべきはそこじゃない。

真に注目すべきはその和了牌。

青山が最後に山から引き入れた牌は（一萬）。

つまり、

……振り込んでいた。

オカルトに救われた形になる。

結局ツモられて点棒は減ったが、それでも満貫直撃の半分。

半荘一回という短期決戦において、この差は大きい。

しかも結果だけで見れば、靖子は青山の待ちをしつかりとかわしたことになる。

……点棒は減ったが、闘える形は作った。

スロースターターの靖子にとっては決して悪くない立ち上がり。

勝負はこれから。

だというのに。

……何だ。この感じは？

心の奥底で蠢く暗い何か。

何かを見落としているような、忘れていたような、既に取り返しのつかない所まで来

てしまった様な、そんな焦燥感。

振り払おうにも振り払えない。

消そうとしても消えない。

自身の中に没頭する靖子。

故に彼女は気付かなかつた。

対面に座る魔神。

その口元が小さく歪んでいることに、靖子が気付くことはなかつた。

II

「ありがとうございましたー」

明るく元気な、さりとして決して不快にならない程度に抑えられた声が店内に通る。

未成年禁制の雀荘にしては珍しい若い少女の声。

だが真に驚くべきは、その恰好。

紺を基調としワンピースに純白のエプロンドレスとカチューシャ。

機能性を重視したシンプルなデザインでありつつも、可愛らしいフリルの装飾が施されている辺りに職人のこだわりが見受けられる。

今少女が身に着けているのは、ヴィクトリア王朝時代の侍従が着用していたとされる

(真偽はともかく) 伝統ある制服——ぶつちやけ、メイド服だった。

少女、染谷まこの祖父が経営している雀荘『r o o f — t o p』は女子バイト全員がメイドに身をやつした、世にも珍しいメイド雀荘。

これは古来のメイドたちの主人に対する忠誠を見習おう——なんてことでは勿論なく、単なる客寄せだった。

……最近はずちも経営が厳しいからのー。

笑顔で店を後にする往年の男性達を見送りつつ、少女は今もぎりぎりの経営に頭を悩ませる。昔馴染みの常連客のお蔭で一定数の客足を確保しているとは言え、それでも新規の客層を確保しないことには小規模な個人雀荘が生き残っていくには難しい。

そのために日々様々な経営努力を行っており、その一つがこのメイド服だった。

ガランと音を立てて扉が閉まった後、まこは浮かべていた笑顔を崩して店内を見回す。

……ようやく一段落した様じゃの。

少し広くなった室内にほっと胸を撫で下ろす。

いつもならこの時間帯にはもう一人バイトの女性がいるのだが、生憎と今日は急用で休み。お蔭で接客にレジにと、まこ一人で奮闘することとなった。

慣れたこととはいえ、流石にきついものがあった。

……まあ。そんな泣き言を言ってられる状況じゃないがの。

何せ今日とはとんでもない爆弾を抱えているのだ。

爆発すれば、全てを壊しかねない劇物が。

……ほんと、藤田さんも無茶を言いよる。

思わずまこはため息をつく。

学生服を着た未成年を店に入れたことだけでも警告ものだというのに、その上卓で打っていることが国にばれればもはや言い逃れはできない。

少なくとも嚴重注意か罰金、下手をすれば営業停止という事態さえあり得る。

こんなことなら最初からあの少年を店に入れなければよかつたかとも思ったが、もはや後の祭り。幸いだったのは、本日店を訪れているのが常連客ばかりだったこと。

十年以上の付き合いがある古株ならば本日の出来事を吹聴することはあるまいと、まこは安堵の息をもらす。

……さて、どうなつとるかの。

とりあえず現状を確認しようかと、まこはエプロンドレスを翻して問題の卓に近づく。

また単純に興味もあつた。

何せあの藤田靖子がルールを冒してまで打つことを熱望した少年。

店側の人間の前に一人の雀士として、気にならない方がおかしかった。

……青山茂喜。確か、のどかと同じインターミドルチャンピオンだったかの。過去の記憶を引つ張り出す。

高校と中学という世代の違い、更には男女の違いもあつたために顔こそ知らなかったが、それでも噂ぐらいはまこは何度か聞いたことがあつた。

曰く、魔神。

曰く、十八万点差をひっくり返した。

曰く、開始から三分で試合を終わらせた。

曰く、相手の手牌が透けて見える。

どれもこれも眉唾な噂ばかり。

話していた男性が酔っぱらっていたこともあり、あの時は聞き流していたが。

……藤田さんの反応を見る限り、もしかしたら本当かも知れんの。

だが仮にその噂が本当だとしても、まこは青山が大勝するとは思っていない。

彼の麻雀を知らないこともそうだが、それよりも一緒に卓を囲んでいる面子がその主な理由だった。

な理由だった。

後輩にあたるのどかは男子に比べれば数は少ないとはいえ、青山と同じインターミドルチャンピオン。そしてもう一人の後輩である咲は、そんな女王に勝つた土0娘。

おまけに藤田靖子という一流の現役プロ雀士までいるのだ。

この三人を相手に圧倒的大差で勝てると思う方がおかしい。

集中を妨げぬようまこは静かにのどかの背後に立ち、そつと様子をうかがう。

……南場。親がのどかつちゆうことは南二かの。

対局が始まってから30分あまり。

半荘一回の平均時間が40分前後であることを考えれば、およそ平均通りに進んでいることになる。どうやら順調な様子にそつと胸を撫で下ろし、まこは卓上から目の前の手牌へと視線を移した。

……ええ感じじや。

中ドラの一の向聴。

安手ではあるがその分受け皿が広い、いかにものどからしい手。

どうやら早そうだという予想を裏付けるかのように、のどかは有効牌を引き入れた。

……待ちの広さが上手く機能したの。三面張は消えよつたが、これで〔六筒〕〔九筒〕待ちの聴牌。

〔六筒〕はドラ表示牌として一枚出ているが、〔九筒〕は生牌。

巡目が早い上に、河を見た限りでは他家が張っている感じもない。

だというのに、

……リーチかけず？

ダメでとつたのどかに、まこは内心で首をひねる。

デジタル的に言えば、余程の点差でもついている限りノータイムでリーチをかける場面だったはず。最後の親番であることは確かだが、のどかは連荘のために自分の打ち筋を変えたりはしない

一体どうしたのかとまこは目線を上げ、のどかの顔をうかがう。

……悩んどる？

そこにあつたのは整った容姿を硬くし、険しい表情で手牌を見つめる少女の横顔。

いや、のどかだけではない。

青山を除いた残り二人の顔もいやに硬いことにまこは気が付いた。

……なんじゃ？

いつも飄々としている藤田まで表情を険しくしている。

まさかそこまで状況が悪いのかと、まこはのどかの豊かな胸で隠された点数表示枠を覗き込んだ。

「なっ!？」

咄嗟に口を手当てした自分をまこは褒めてやりたかった。

だがそれほどまでに、そこに映し出されていたのは異常な光景だった。

藤田靖子：10900

原村和：6700

青山茂喜：79000

宮永咲：3400

……なんじゃこの点数は!?

25000点持ちの勝負ではまず見られない、圧倒的と呼ぶのもおこがましい点数差。

しかも卓を囲んでいるのはそんじょそこらの素人とは違う、紛れもない実力者達なのだ。

仮にバカヅキしたとしても、ここまでの差が開くとは考えにくい。

……なるほど。道理で藤田さんが気に掛けるわけじゃ。

よくよく考えてみれば、少し強いぐらいの打ち手に藤田があそこまで執心するはずがなかったのだ。

背筋に冷たい何かが走るのを感じつつ、まこは先の不可解な選択の意味を理解した。

リーチをかけなかったのではない。

かけれなかったのだ。

……ウチの店は飛びあり。

リーチをかけてしまえば最低でも出和了り7700、ツモ和了りなら12000（1

16000は12000計算)。直撃でもツモ被りでも咲は飛んでしまう。

……おまけに藤田プロから和了つても、もし裏ドラが一つでも乗ってしまえばその時点で飛びじゃ。

ウマありならともかく、順位点のつかない半荘一回の勝負においてわざわざ収支をマインナスに確定させてまで2位を取りに行くことに意味はない。

それまでの勝負に勝っていないということもあり、絶望的な確率とは言えのどかが一位を諦めずに狙いにいくのは半ば当然だった。

……一番ええのはリーチをかけて、なおかつトップがそれに振り込む形じゃが。

正直、それは難しい。

何せ青山以外から出てもツモっても駄目なのだ。

そんな確率の低い運任せのギャンブルをのどかが選択しようはずもない。

ゆえに例え手が安くなろうともリーチはかけない、かけられない。

……となると、次善はダメでトップから直撃を奪う事かの。

幸い、のどかは山越を狙える位置にいる。

ダメならば藤田から和了つても飛びはないが、次局以降の事を考えればここは何としてでも青山から直撃を奪いたい。

最悪それで流局したとしても、連荘になればまだチャンスはある。

そうまこが考えている間にも順は進み、西家の咲へと番は移った。牌を引くその顔にはいつもの笑顔はなく、今にも泣きだしそうな表情と頼りない手つきで手牌から牌が切られる。

……いきなりきよつたか！

咲が切つたのは〔六筒〕。

のどかの当たり牌。

だが当然、のどかはそれを見逃し番は北家の藤田。

まくりの女王と呼ばれる彼女でもこの点差からではいかんともし難いのか、厳しい顔のまま前巡と同じくツモ切り。

それに合わせる形で、のどかも不要牌をツモ切る。

……これで出てくれたらいいんじゃないが。

ある種の願望も込めて、次番の青山に注目する。

ゆつくりと、だが淀みのない流麗な動きで山から牌がツモられる。

時間にして数秒足らずの動作だというのに、その一連の流れは嫌に自然でそこだけ時間が止まっているかのようにさえ感じられた。

僅かに生まれる一瞬の空白。

その空白の中で青山の口元が小さく歪むのをまこは見た。

「カン」

……カン？

後は逃げるだけのトップがここでわざわざリスクを冒す意味がわからない。

疑問符を浮かべるまことは対照的に、咲の表情がますます強張り、体の震えはより一層大きくなっていく。

そしてパタリと、青山の手牌から4つの牌が倒された。

……なっ!?

まこが驚愕の声を内心であげるが、それはのどかも同じだったろう。

声こそ出していないが、びくりと魅惑的な肢体が大きく震えるのをまこは確かに見た。

……（九筒）暗槓って。

そう。青山が暗槓したのは、のどかの当たり牌である（九筒）。

これで残っていた六枚の和了り牌の内、四枚が潰されたことになる。

偶然なのかそれとも故意なのか。

測り兼ねるまこを尻目に青山は王牌から牌を引き——そのまま手牌を倒した。

……は？

「ツモ」

変わらぬ平坦な声が卓に通る。

まこは一瞬何が起きたか理解できず呆然とし、すぐに我に返った。

……嶺上開花ツモのみ？

いや、と王牌に目をやる。

今のカンで現れた新たなドラは〔九筒〕。

つまりは、

「嶺上開花ツモ。ドラ四。3000・6000」

藤田靖子：7900

原村和：700

青山茂喜：91000

宮永咲：400

四人の内半分がリーチもかけられないという異常事態。

戦慄がまこの体を駆け巡る。

その圧倒的点数差に、ではない。

さつきの嶺上開花。

役なしから12000にまで持っていたことも十分驚きだが、真に驚嘆すべきはその

和了形。

……〔九筒〕を暗槓で止めたうえに、嶺上でツモりよったのは。

〔六筒〕。

〔九筒〕と同じのどかの和了り牌。

しかも、青山から見れば3枚ありかの見えた地獄単騎からの和了。

……偶然——にしては出来過ぎ取るの。

こうなれば認めるしかなかった。

どうやってかはわからない。

捨て牌を読んだのか（待ちを読めるような切り方はしていなかったが）、勘か、それとも何か別の要因があったのか。

いずれにせよ、間違いなく青山はのどかの待ちを見抜いていた。

……のどかにしてみればたまったもんじやないの。

直撃をとるためにリーチをかけず、見逃しまでしたというのにあっさりとその目論見を看破され、逆にも利用される形で和了られた。

プライドを傷つけられたというには、余りにもダメージが大きすぎた。

のどかは何かを堪える様に固く拳を握り、震えた声で呟いた。

「また……！」

……また？

またというのは、こんな常識外れの出来事が前にも起きたということだろうか。それ以上のどかは何も語らなかつたために真相はわからない。

しかし、もしもそうだとしたら。

……魔神。

これ以上青山を表すのに適した言葉もあるまいと、まこは思った。

重苦しいという言葉が目に見えそうなほど、暗い雰囲気の中で次局が始まる。

南三・親：青山茂喜。

……こりや完全に終わったの。

結果を見るまでわからないというのが勝負の鉄則だが、どうポジティブに考えてもこ

こからの逆転は不可能。

後は飛ぶのが早いか遅いかの違いだけ。

何せ青山にしてみれば喰いタンやツモあがりだけで十分お釣りが――

「リーチ」

「はぐ。」

今度は思わず声を出してしまった。

リーチ？

こりこりで？

しかも、

「オープン」

ばかりと、青山の手牌が晒されるとその場にいる誰もが息を呑んだ。

美しい形だった。

刻まれた文字や図柄こそ違うが四種の牌がそれぞれ三つずつ重なり、それらに属さない孤独な牌が一つ。

〃四暗刻単騎待ち〃

……一巡目ってことはダブリー——って?! 何でリーチなんじゃ?! しかもオープンで四暗刻単騎って……ああ、もう! わけがわからんわっ!?

ぐしゃぐしゃと、メイドにはあるまじき形相で髪を掻きむしる。

目の前の光景はまこの闕値を大幅に超えていた。

そしてそれは卓に座る三人も同じ。

困惑と動揺を浮かべながら、咲は青山の和了り牌とは異なる牌を切り出した。

それは当然の帰結。

四暗刻単騎待ちのオープンなど、半ば和了り放棄にも等しい愚行。

だというのに。

……何なんじゃ。この不安は。

咲、藤田と番が進むたびにまこの心の奥底から次々と湧き出していく不安。

大事なことを見落としているような、見えない何かに捕まっているかのような、心を焦がす圧倒的な不安。

それはのどかが牌を切る時に最大を迎え、突如としてまこの中から消失する。

……ああ。そうじゃったか。

青山が牌をツモると同時に、まこは理解した。

不安は消えたのではない、感じなくなったただけなのだ。

行き過ぎた恐怖を体が受け付けない様に。

突き抜けた痛みを感じなくなるように。

それは人間としての防衛反応。

まこは酷く落ち着いた気分で、眼下の光景を受け入れた。

「ツモ。四暗刻単騎 960000」

藤田靖子：|24100

原村和：|31300

青山茂喜：194000

宮永咲：|31600

雨が、あがった。

第三話

「——で、呆気にとられていたらいつの間にか雨が止んで、気づいた時にはその男の子はいなくなっていたと」

I

『……そうじゃ』

携帯越しに聞こえてくる年下の親友の言葉の中には些かの後悔が含まれていることを久は知っていた。知っていたが気付かないふりをしつつ、「なるほどね」と表面上相槌の声を入れながら、竹井久は自室の窓を開けた。

場所が車道に面した住宅街だけあってお世辞にも見晴らしがいいとは言えないが、それでも夜空に浮かぶ綺麗な三日月ははつきりと見える。

「それで、宮永さんとのどかの様子はどうだったの？」

『……最悪じゃ。二人ともかなり精神的にまいっとる。まあ無理もないがの』

「そんなに？」

『のどかはリベンジしてやろうって気力がまだ多少なりとも残ったが、咲に関して

は完全に心が折れとる。正直、県予選までに立て直すのも危ういの」
「そう」

薄手のTシャツに短パンというリラックスした格好で窓枠に腰を下ろした久は、ひんやりと冷たい夜風を浴びながら納得したとばかりに小さく息を漏らした。

「道理でいつまで待っても二人が戻ってこなかったわけだわ」

『もしかしてずっと部屋におったんか?』

「まあね。あの二人なら合宿しようとしても言いに戻って来ると思っていたから」

結局そうはならなかったわけだが。

……ほんと予想外だったわね。

今回の雀荘見学の目的は麻雀部の二大エースである咲とのどかに上には上がいることを実感させ、更なる向上心を持たせることにあつた。

そのために藤田靖子という顔馴染のプロ雀士に連絡を取り、二人をへこませてくれと久はお願ひした。

ところがだ。

蓋を開けて見れば、靖子以上の実力を持った怪物と遭遇し向上心を持つどころか、圧倒的な実力差に心を折られている。

……これは靖子に何か奢ってもらわないと割に合わないわね。

多忙の中で頼みを引き受けてくれた靖子を悪く言う気はないが、それでも間接的には言え原因の一端となったのは間違いなく彼女。

何か奢ってもらったとしても罰は当たると、久は自分の中で勝手に結論付けた。

『それでどうするつもりじゃ?』

「うん?」

『合宿じゃよ。そんな風に咲達の行動を予想しとったつちゆうことは、もう宿はおさえとったんじゃろ?』

「ああ……わかった?」

『あなたのことじゃからの。何となく予想はついとったわ』

スピーカーから聞こえてくる呆れたような声。

まだ一年足らずの付き合いだというのに、どうやらあつちは自分の性格をよく知っているらしい。

……まあ。それは私にも言えるかもしれないけど。

妙に濃密だった去年を思い出しつつ、久は壁にかかったカレンダーに目をやった。

「一応今週末からの3日間で合宿所をおさえてはいるんだけど……」

『あんな状態で合宿をさせても意味はないと思うがの』

「でしようね」

こうやって軽く聞いただけでも、二人がいかに深刻な状態にあるのかがよくわかった。確かにそんな状態で合宿をやった所で殆ど効果は見込めないし、むしろ焦らせて逆効果になりかねない。

「けど、合宿は絶対に必要よ」

『龍門渕か……』

「ええ」

昨年、6年連続で県代表だった風越女子を決勝で完膚なきまでに打ちのめした龍門渕高校。試合に出たレギュラー全員がそれぞれ高い実力を持っていたが、その中でも一際異彩を放っていたのが、

『天江衣……昨年の牌譜を見たが、ありや本当に化け物じゃ』

「彼女の打ち方に対抗できるのは恐らくウチでは宮永さんぐらいね」

『まあ。咲も大概異常じゃからのお』

「ふふ。酷い言いようね。でも、その宮永さんでも今のままじゃ天江衣には届かない」

おまけに、天江衣以外のレギュラー陣も全員が当時一年生。

当然、今年もそっくりそのまま出てくることだろう。

「龍門渕に風越、そしてその他大勢の強豪たち……これら全部を倒して全国に行くには、私達全員のレベルアップが必要不可欠よ」

それゆえの合宿。

たった数日で何が変わるのかと言う人もいるかもしれない。けれど、その「たった数日」が鍵なのだ。久は確信していた。それに、

「ここでドタキャンしちゃったら、キャンセル料とられちゃうしね〜」
『つて！ 本音はそこかい！』

ビシツと音が付きそうな鋭い突っ込み。

冗談よと久は軽く笑い、僅かな間を明けて再度口を開いた。

「宮永さんとのどかの事だけど、私に任せてくれないかしら？」

『何とかできるんかいな？ 合宿まで後一日しかないんじゃないぞ』

「できるか、じゃないわ。何とかするのよ」

凜と芯の通った力強い声。

やっぱりかなわんはとスピーカーの奥でまこは小さく溢し、

『それで具体的にどうするつもりじゃ？』

「うーん。内緒」

『おい』

「明日になったらわかるわ。それまでは……ね？」

『……なんか嫌な予感がするんじゃないが、了解じゃ』

「あら。失礼ね」

軽口をたたきつつ、久は壁際の時計に目をやった。

もうすぐ日付が変わろうとしていた。

「もうこんな時間か……」

『じゃけえ。伝えることは伝えたいし、そろそろお開きにするかの?』

「そうね……あつ。切る前に一ついいかしら?」

『うん?』

「青山茂喜と天江衣、戦ったらどっちが勝つと思う?」

意図があるわけではなかった。

ふと思いついたから聞いてみた、ただそれだけの問いかけ。

唐突の問いかけにまこは困ったような声を上げた。

『どっちが勝つと言われてものお……:……わしは天江の試合を直には見ておらんし、青山に至ってはたった二局見ただけじゃ。それでどっちが強いかわかれも、わからんというのが正直な所じゃ』

「そう」

返ってきたのは半ば予想していた答え。

さして期待していたわけではない。

わからないなら別に別にかまわなかった。

ありがとう電話を切ろうとすると、

『ただ……』

「うん？」

『あれが負ける姿は想像できんのお』

電源ボタンに指がかかる直前、熱にうなされたような一言が久の指を止めた。

それが全てだった。

「そう」と、もう一度久は同じ二文字を繰り返かえした。

そして短く礼を述べて今度こそ電話を切った。

「ふ〜」

大きな息を吐きながら、ベッドへと倒れこむ。

本音を言えばこのまま何もかもを忘れて夢の中へと逃避したいところだが、生憎そう
いうわけにもいかない。

……上手くないものね。

咲とのどかの実力を伸ばすために良かれと思ってやったことが、まさかの裏目。

何事も計画通りにはいかないというのは世の常だが、それでも少しぐらいは大目に見

たつていいだろうにと思わず久は普段信じていない神様を恨んだ。

……まここにはああ言つたけど。

正直、咲とのどかを立ち直らせる絶対的な自信があるわけではなかった。

そもそも久はカウンセラーでもなんでもない、ただの女子高生に過ぎないのだ。
絶対的な自身など持てようはずようもない。

……でも、やるしかない。

県予選まで後一週間、合宿まではたつた一日。

くよくよしている暇などどこにもありはしない。

……今の状況に何か意味があると考えましよう。

一見マイナスに見える事柄にも全て意味がある。

麻雀の打ち筋にも見られるこの考え方が、竹井久の根本。

ごそごそと、寝ころんだまま枕元に無造作に置かれた学生靴に手を伸ばす。

……まここによれば、彼が着ていたのはオーソドックスな黒の学ラン。

日本の高校で最も多く採用されている制服。

学生靴を持っていたという事も踏まえれば、帰宅途中の可能性が高い。

……けど、あの時間にあの辺りで停まる電車やバスはない。

……ここが長野の田舎町だという事が幸いした。

一時間に一本来るかこないかという交通の便の悪さ、そして碌なより所もないことを考慮すれば、前の電車やバスに乗ってきたとは考えにくい。

……つまり、学校があるのは徒歩か自転車で行ける範囲。

少し広めの六キ口圏内で探した場合、該当するのは僅か三校。

その内、黒の学ランを採用しているのは、

「ウチだけ……か」

ほつりとこぼし、鞆から数枚のプリントを取り出す。

秋に迫った文化祭の参考資料にと、副会長から半ば無理やり渡された全学年のクラス名簿だった。

……あつた。

一年I組、青山茂喜。

……I組つてことは別館。道理でこれまで見なかったわけだわ。

今年は例年よりも新入生の数が多かったために、上級生のクラスがある本館とは別に、別館にも一年生のクラスが作られている。それまで殆ど使われていなかった別館を有効活用出来たと教師たちは喜んでいたが、その一方で本館と別館が半ば断絶状態にあるという問題も起こっていた。

……これについてはまた後日の議会で話すとして。

天江衣という魔物と闘う前に、それに匹敵——あるいは凌駕する怪物に出会えた。そして怪物は同じ清澄高校にいる。

幾重もの偶然が折り重なった事実が指し示す意味。

その意味を考えて——苦笑する。

……これは随分と分の悪い賭けになりそうね。

麻雀で例えるなら最下位で迎えたオース、逆転の役満を聴牌したものの待ちは相手に読まれているドラの地獄単騎待ちに近いかもしれない。

確立だけで言えば、てんで話にならない。

だが、

……悪待ち上等。

多面待ちの好形なんかより、よっぽど自分らしいと久は笑う。

「目には目を、齒には齒を、麻雀には麻雀を」

勝負は明日。

明日は忙しくなりそうだと考える久の脳裏に、ふととある疑問が浮かんだ。

……そういえば。

青山茂喜。

昨年度春季、及び夏季インターミドル個人戦二連覇。

及び、夏季インターミドル「団体戦」優勝。

「どうしてウチ（麻雀部）に入らなかつたのかしら？」

ぼつりと呟かれた疑問に答えはなかつた。

II

——なぜそこだったのだろう。

長野県立清澄高等学校。

昔ながらの自然が色濃く残る南信地方の田舎町にひっそりとそびえ立つ、今年で創立六三年を迎える公立校。

掲げた校風は自由。

自慢は田舎であることを活かした広大な敷地と数年前に建てられた新しい校舎。

偏差値レベルは学区内四番目で、全国的に見れば中の中の中の上と言った所。

低くはないが決して高くもなく、進学成績もそれに見合ったものとなっている。

では部活動が盛んなのかと言えはそうでもなく、広大な敷地には種類と数こそあるがこれといって際立った成績を残した部活はここ十年ほど現れていない。

つまるところ清澄がどんな高校かと言われれば、その敷地の広さ以外は何ら変わりのないごくふつうの公立高校と言わざるを得ない。

なぜ数多の推薦を蹴り、住む場所を変えてまで彼がそこを選んだのか。有名校への反発心からなのか。

その自由な校風に惹かれたのか。

知り合いがそこにいたからなのか。

誰かから紹介されたのか。

それとも本当にただの偶然なのか。

—— 答えはわからない。

けれど実際、彼は—— 青山茂喜は確かにそこにいた。

◇

見上げれば広がる一面の青に、降り注ぐ初夏の日差し。

流れるそよ風はほんのりと冷たさを帯び、優しく頬を撫でていく。

遠くから風に乗ってほのかに聞こえて来る生徒達の声はどことなく上ずっていて、まるで明日から訪れる大型連休の到来を暗示しているように思えた。

こんな場所じゃなければもう少し様になったろうになどと思いつつ、少年は小さくなつた菓子パンを口の中に放る。

行きがけに買った安物だけあって、お世辞にもおいしいとは言えない。

やはり一つ三十円は幾らなんでも安すぎたかと、少年は口の中に嫌というほどこびり

つく人工的な甘さを購買の自販機で買ったコーヒーで流し込む。

……ねむ。

壁にかかった時計は間もなく一時を過ぎようとしていた。

生徒指導室に呼び出しを受けた少年にとつてはいつもより三〇分ほど遅い昼食であつたが、眠気も同じだけ遅れてやってきていた。

律儀なことだとあくび一つ、少年は目を手元の紙コップへと下ろす。

ゆらゆらと小刻みに揺れる黒い水面に、うつすらと画が映る。

適当に切つたかのようなざつくばらんな黒髪に、少し縦長の顔。

清澄高校一年I組、出席番号二番青山茂喜。

それがここにおける今の彼の身分だつた。

茂喜は残つたコーヒーを全て飲み干すと空になつた紙コップを握り潰し、そのまま固いコンクリートの上に寝転がる。

学ランが砂埃で汚れるが、それを咎める者はこの場にはいなかった。

……もうすぐ二年か。

雲一つない、青色の絵の具で塗りたくつたような空を見上げながら茂喜はぼんやりとそんなことを思う。時が経つのは本当に早いもので、気がつけばあれから二度目の夏を迎えようとしていた。

——二年。

長いようで短い、けどやっぱり長いそんな時間。

全てが変わったあの日。

世界が色を失ったあの時からもうそれだけの時間が経っていた。

茂喜は固い地面に投げ出していた右手を持ち上げ、冷たい掌で自分の胸元を掴んだ。

学ラン越しに感じる小さな固い感触。

それにどうしようもない安心感を抱いている自分に気づき、苦笑する。

……変わってない。

よかったと心の中で小さく呟く。

それでこそ、わざわざ東京を離れた甲斐があったというものだ。

……さて。

茂喜としてはこのまま夢の世界に旅立ちたいのだが、それをして放課後まで目が覚めなかったのはつい昨日。そしてその件で（ついでに言えばこれまでの態度も含めて）学生にとって貴重な昼休みを生徒指導室で費やすことになったのがついさっきのこと。

ここで昨日同様また午後の授業をぶちって放課後まで睡眠に励めば、今度は軽い説教では済まないことは明白だった。

教室で寝るか、茂喜が起き上がったその時だった。

音がした。

屋上と三階とを結ぶ唯一の扉。その奥から聞こえてくるカンカンと一定のリズムを伴った金属音。

その音を茂喜はよく知っていた。

ここに来る時に毎日聞いている、三階から屋上へと延びる金属の階段を叩く音。

……誰だ？

段々と大きくなる音を耳にし、茂喜はすつと目を細めた。

ただでさえここはあまり人気のない別館の屋上。

稀に数人の生徒が興味半分で来ることはあるが、こんな昼休みの終わりに訪れる酔狂な生徒はこれまで目にしたことがない。

一体何の用かと茂喜が疑問符を浮かべている間にも音は大きくなっていく。

そして、立てつけの悪い扉が耳障りな音を鳴らしてゆっくりと開かれた。

第四話

I

本館と別館によつて構成される本校舎から少し離れた小高い丘の上。

そこにもう一つの清澄高校があつた。

清澄高等学校旧特別校舎、通称旧校舎。

今は殆ど使う生徒がないその校舎の屋根裏部屋に清澄高校麻雀部の部室はあつた。

「しかし、部長遅いじゃえ」

片岡優希はそう呟くと、包装紙で丁寧に包まれたタコスをかじつた。

赤いボンボンでツーサイドアップにあげられた明るい茶髪に、暖かな色を帯びた頬、

退屈だとばかりに口を八の字に曲げ、椅子から投げ出した足をぶらぶらと動かすその姿はただでさえ幼い外見を更に幼く見せた。

「京太郎、何か知ってるか？」

「いんや、授業が終わつたらすぐに部室集合としか聞いてないぜ」

「使えない犬だじえ」

「誰が犬だつ！」

やれやれとばかりに頭を振った優希に、京太郎と呼ばれた少年は声を荒げた。

柔らかい印象を与える整った顔立ちは明るさをおさえた金髪とよく合っており、高い身長とあいまってちよつとしたモデルの様にも思えた。

声を荒げたものの決して本気ではなかつたのだろう。

つたくと京太郎は呆れた様に肩をすくめ、背もたれにもたれかかつた。

「でもまあ、授業が終わつたら『必ず』部室に集合つて確かに珍しいよな」

京太郎は昼休みに送られてきたメールの文面を思い返した。

もともと自由なところがある部長の性格が反映されているためか、他の部活と比べて麻雀部の空気はかなり緩い。

普段の練習も強制ではなく、あくまでも参加するかは任意。

だからと言ってそれにかまけて練習をサボる様な部員は麻雀部にいないが、それでも部長がこうして『必ず』何て言葉を使ったのは初めてじゃないかと京太郎は思った。

「やっぱ来週の県予選のことか？」

「けどルールなら昨日の放課後聞いたじえ」

「だよな」

京太郎は背もたれに体重を預けると、なあとこれまで一度も口を開いていない右隣に座る少女へと顔を向けた。

「咲はどう思う？」

「えっ、うっ、うん」

話を振られた宮永咲はびくつと体を震わせ、一瞬京太郎の顔を見るものの結局曖昧に言葉を濁して俯いた。

心ここにあらずを地で行く幼馴染に、やっぱりおかしいと京太郎は顔を顰めた。

「咲のやつ、朝からなんか変なんだよな。話しかけてもどっか上の空だし、妙におどおどしてるし」

「変なのはのどちゃんも同じだしえ」

「えっ、のどかも？」

「うむ。あれを見るがいい」

優希が指差した先にあつたのは、優希達に背を向けてパソコンの前に座る少女の姿。角度的に京太郎が座る位置からチラリと見えた横顔は真剣そのもので、厳しい表情で画面を見つめていた。

「あれの何がおかしいんだ？　いつもの様にネット麻雀を打ってるだけだろ？」

「お前の目は節穴か！　のどちゃんは一体いつからああしてると思っているじえ！」

「いつからって……詳しい時間までは知らねえけど、俺と咲が部室に来た時には……」
「……部室に入ってきた時、のどちゃんから何か声をかけられたか？」

「いや、何も。つーか、俺達 came ことにすら気づいていない——って、ああ！」

そういうことかと、京太郎は声をあげた。

優希はうむと重々しくうなずく。

「いくらネット麻雀に集中してたととしても、礼儀正しいのとちゃんはこれまで誰か来たら必ず気付いて挨拶してたじえ」

「たしかに……」

「それだけじゃないじえ」

「うん？ 他にもまだあるのか？」

「うむ。登校の時元気がないようだから励まそうとのどちゃんのおっぱいに触ったけど、何の反応もなかったじえ。普段なら怒ってるのに、何も反応ないなんて明らかにおかしいじえ！」

「いやその確かめ方はどうなんだ？ って、待てよ？ 何の反応もないってことはもしかして今なら俺が触っても……」

「こらっ！ バカ犬！ わたしのおっぱいで何を想像している！」

「いや冗談だって！ だから蹴るな蹴るな！ それにお前のじゃないだろ！」

「相変わらず仲がええのお〜」

突如として聞こえた声に二人は動きを止め、声のした方へと揃って顔を向けた。

そこには大きなあくびをしながら、部屋の隅にあるベッドから体を起こした少女の姿があつた。

「あつ、起きた」

「あんたらがやかましゆうするから、目が覚めてしもうたわ」

呆れたように言うと、染谷まこはベッドから離れ優希達が囲む雀卓の空いた残りの一つの席に腰かけた。

「それで染谷先輩は知っているじえか？」

「なにがじゃ？」

「部長が俺達を集めた理由つすよ」

優希の質問に京太郎が補足を入れると、まこはああと眠たげな声を漏らした。

「さあ。わしも聞いとらんの」

「そうつすか……」

「まあ。何となくはわかるがの……」

チラリと、まこは対面で俯く少女に目をやる。

まこの言葉に京太郎達が聞き返すよりも早く、ぱたんと勢いよく扉が開かれた。

のどかと咲を除いた3人の視線が一斉に扉へと向く。

「うん。ちゃんとみんな集まっているわね」

呼び出した張本人——麻雀部部长竹井久は部屋を見回し満足げにうなずいた。

まこは小さく息を吐き、

「まったく。呼び出した本人が一番遅いとはどういうことじゃ」

「あはは。ちよつと準備に時間がかかっちゃってね」

「準備つすか？」

「それって今日私達を集めたのと関係あるのか？」

「ふふ。それは今から発表するわ……ほら。宮永さんとのどかもこつちに注目してくれ
る？」

その言葉にゆっくりと咲は顔を上げたが、のどかは気付いていないようで相変わらず
パソコンに嘯り付いたまま。

仕方ないわねと苦笑しつつ、久は窓際のパソコン机に向かい画面に集中するのどかの
肩に手を伸ばした。

「こら、部長が話をしているんだからちゃんと聞きなさい」

「きゃっ！」

可愛らしい悲鳴が室内に零れた。

ぐるんと勢いよく椅子が回転し、のどかは今気が付いたとばかりに驚いた顔で久を見つめた。

「部長……」

「集中するのはいいけど、ちよつとは意識を外に向けないとだめよ」

「すみません……」

自覚はあつたのか、どこことなく後ろめたそうな声。

久は肩をすくめると、改めて全員に向き直った。

「今日集まってもらったのは他でもないわ。実は、あなたたちに紹介しておきたい人がいるのよ」

「紹介しておきたい人？」

「誰だじよ？ まさか部長の恋人かっ!？」

「違うわよ」

紹介できる恋人がいるんなら良かったんだけどねと久は苦笑し、

「ほら。ウチって部員が少ない上に対外試合とかないでしょ？ 大会まであまり時間もないし、いつもの面子以外での対局も必要だと思つて来てもらったのよ」

久の言葉に、ああなるほどと皆一樣に納得したような言葉を漏らす。

「なるほど。つてことは、俺達の練習相手つてことですか？」

「一体誰だじえ？ まさかプロかっ?！」

「あはは、流石にいくら私がプロと知り合いで、二日続けて呼ぶことは無理よ」

「むく。プロじゃないのか。でもそれなら、昨日咲ちゃんとのどちゃんがやったみたい
に染谷先輩の雀荘に行つた方が早いじえ」

雀荘と言う言葉にピクリとのどかと咲が反応する。

そんな後輩の反応を目に入れつつ、まこは優希に同意した。

「まつ、確かにそうじゃの。プロを呼ぶんならともかく、そこらの打ち手を呼ぶ意味はあ
んまりないような気がするがの……」

否定まではいかずとも、どことなく疑問視する声上がる。

しかし久は予想していたとばかりに、形のいい胸を張った。

「確かに単に場馴れするだけならまこの所にいけばいいわ。でも、私達が大会で闘うの
はあくまでも同じ高校生。ならより実践的な練習をするにはそれに近いものにした方
がいいと思わない?」

「えっ。それってつまり……」

「練習相手って私達と同じ高校生じよか!？」

「でも確か今年からルールが変わって県予選一カ月前からは男女問わず、他校の生徒と
打つてはいけない決まりのはずじゃ……」

怪訝な表情で大会規則を思い返すのどかに、久はくすりと笑みを浮かべた。

「そうね。確かに『他校』の生徒とは打ってはいけないわ」

「おい。あんたまさか……」

「紹介するわね。入ってきてもらえるかしら」

扉ごしでも聞こえる様に張り上げられた声が出てから数秒、木のドアがゆつくりと開かれた。

「あつ」

「あ」

そして扉の向こうから現れたものを見た瞬間、ある二人の少女の声にならない声が零れ落ちた。久は『それ』の下に歩いていく。

そして『それ』の隣に立つと、様々な様相を呈す部員を見渡した。

「紹介するわね。一年I組の青山茂喜君——彼が今日の対戦相手よ」
そういつて、久はにやりと笑った。

II

言葉が出なかった。

それを見た瞬間、宮永咲は時が止まったように錯覚した。

…な………んで？

息が苦しい。

体が熱い。

動悸が激しくなり、身体は自然と震えだす。

椅子に座っていてよかったと咲は思う。

もしそうでなければ、きつと立つことすらままならなかつただろうから。

………なんで、あの人が？

昨夜、トラウマと言うのも生ぬるい恐怖を咲に植え付けた張本人。

彼の前に打った藤田と言うプロの時はまだ耐えられた。

彼女も今の咲では及ばぬほど強かったが、それでも彼女が発していたのは幼い頃に姉から感じたものと同じ。

だから恐怖こそした。が何とか耐えられた。

………でも、あれはそんなものじゃなかった。

こんなものがこの世に存在しているのかと、そう思わせるほどの圧倒的なまでの力

。同じ人とは思えない、まるで神話から抜け出したような人智の及ばぬ力をあの少年から咲は感じ取った。

そして実際の対局では咲の力は全くと言っていいほど通じず、逆にそれすらも利用して少年は異様なまでの力で場を蹂躪した。

……怖い。

部長が早速打ってもらいましょうかなどと言っているが、そんなことは耳には入らなかった。咲は今すぐにでもこの場から逃げ出したかった。

逃げ出して、どこか誰もいない場所で暴風が立ち去るまで蹲っていたかった。

目線を床へと下ろし極力「それ」を目にいれないようにしながら、咲は何とかして自分の体に活を入れる。この場から一刻も早く逃げなければならぬ、そんな焦燥感だけが何とかして華奢な体を立ち上げらせようとする。

しかしそんな努力を嘲笑うかのように、

「それで相手だけ……宮永さんとのどか、あなたたちが打ちなさい」

——死刑宣告が下された。

「わ……たし……ですか？」

「ええ」

震えた声で咲は縋るように久の顔を見上げたが、返ってきた答えは酷くあつさりしたものだった。

それ故にそれが事実なのだとわかってしまう。

わかってしまった。

「そんな……む……りです」

「いいえ、無理でも戦ってもらうわ」

「そんな……」

「部長。今日は何か咲の奴調子悪そうだし、ここは俺が代わりに……」

「駄目よ」

尋常ではない様子の咲を案じたのだろう。

京太郎の助け舟も久は即座に切り捨てた。

「これは宮永さんじゃないといけないの。理由は——言わなくてもわかるわよね？」

ちらりと向けられた含みのある眼。

全部わかっている——まるでそう言っているかのように、咲はうつむくしかな

かった。

「で、でも……」

「やりましょう、宮永さん！」

「原村さん……」

何とかして逃れようとする咲の手を、同じく指名されたのどかが握った。

咲を見つめる大きな瞳の奥には熱がこもっている。

「折角リベンジする機会がやってきたんです。一緒に戦いましょう。そして、今度こそ勝つんです！」

「むり……だよ……」

「無理じゃないですよ！ たった一回負けただけじゃないですか！ やる前から諦めてどうするんですか!?!」

「だっ……だっ……」

理解してしまつたから。

絶対に勝てないのだと、どれだけ努力を重ねても決して届くことはないのだと。

「やっぱり……私には無理……だよ」

「つつー！」

のどかの頬が熱を帯びた。

きゅつと唇を噛み、のどかの細い手が咲の肩を強く握った。

「約束したじゃないですか！」

「原村……さん？」

「一緒に全国に行こうって！ 行ってお姉さんに会うんだって、宮永さんそう言ったじゃないですか！」

「そ、そうだけど……」

「それとも、宮永さんにとって全国っていうのはそんなものだったんですか!? この程度のことで諦められるほど全国は軽いものだったんですか!」

「ち、ちがうよ」

「だったら!」

「ほんと、いつもは決して見せない荒々しい所作でのどかは麻雀卓を叩いた。

「一緒に打ちましょう!」

「う……うん」

決して吹っ切れたわけではないのだろう。

咲の顔には未だに隠し切れない恐怖の表情が映し出されている。

それでも咲は小さくうなずいた。

「心の準備は出来たかしら?」

「……はい」

「よろしい。じゃあ悪いけど、宮永さん以外の三人は席を空けてくれる?」

「それは構わんが……のどかと咲、それにそっちの青山を入れても三人じゃが後の一人はどうするんじや? わしらで勝手に決めていいんかの?」

「それなら私が入るじえ!」

はいはいと勢いよく優希が手を挙げる。

見ていて微笑ましくなってくるその光景に久は笑みをこぼした。

「優希には悪いけど、入る面子はもう決まってるのよ」

「むゝ。残念だじえ」

「優希じゃないってことは俺か染谷先輩ですか？」

「いいえと久は頭を振り、

「私が入るわ」

第五話

I

咲を残してそれまで麻雀卓に座っていた部員達が壁際へと移動し、空いた3つの席に久、のどか、青山が順に座る。

そこに普段の和やかさはない。

まるで全国大会決勝に来たかのような張りつめた空気が卓を覆う。

全員が席に着いたことを確認し、久がゆっくりと口を開いた。

「初めに今回のルールを説明しておくわね」

「ルール……ですか？」

「そうよ。さつきも言ったけど、これは県大会に向けての練習。なら当然より本番に近くなるよう、ルールもそれに合わせるべきでしょ？」

「はあ」

「今回は県大会の予選を意識して勝負は半荘一回。持ち点は先鋒の原点にあわせて十万点とするわ。ウマヤオ力はなしの飛びあり。半荘終了時点で一番多く点棒を持っている人の勝ちよ」

その他の細かなルールは来週行われる県大会と同じ。

それでいいわねと久が同じ卓に座る三人を見回すと、のどかと咲が小さく頷いた。よろしいと、残った対面へと顔を向ける。

「青山君もそれで大丈夫かしら？ 何なら大会のルール規約を渡すけど？」

「……問題ないです」

「そう。なら始めましょう」

開始の言葉と共に自動卓に息が吹き込まれ、洗牌された牌が四つの均等な山となって卓上に姿を見せる。

元々席についていた咲が仮親となり、卓中央のスイッチへと手を伸ばす。

コロコロと二つのサイコロが勢いよく回転し、数秒の時間を置いて止まった。

出た目は七。

つまり、咲の対面に座っているのどかが起家という事になる。

決まった並びに従いそれぞれが山から牌を取っていく。

東一局

起家：原村和 1000000

南家：竹井久 1000000

西家：宮永咲 1000000

北家：青山茂喜 100000

……青山君がラス親か。

北家の青山が最後の手牌となる十三枚目の牌を引き終わるのを確認し、久は伏せていた牌を開いた。理牌し、余り良くない配牌に苦笑しながらそつと目線だけを対面に向ける。

……できることならのどかか宮永さんになってほしかつただけ。

しかし賽の目で決まった以上仕方がない。

表情には出さず、しかし内心でぼやきながら久は余分な字牌を切り出した。

そして誰も動きを見せることなく迎えた三巡目、最初に動いたのはのどかだった。

「チー……」

涼やかな、しかしよくよく聞けばいつもより気合の籠った発声が卓に広がる。

手牌から二萬、三萬を晒し、のどかは青山の捨てた四萬と共に自卓の右側へと置いた。

「ポン」

そして次巡、今度は咲の捨てた（二筒）を鳴きこれで二副露。

序盤からの速い展開についていくものではなく、二副露した三巡後にあつさりとのどかは手牌を倒した。

「ツモ。500オールです」

ドラや赤ドラもない、断么九のみでの和了。

和了形や河を見た限りではもう少し伸びる余地のありそうな手ではあったが、のどかはあつさりとしてそれを捨てて確実に点数を取りに行つた。

……のどからしいと言えぱのどからしいけど。

しかしと久は内心で首をひねる。

堅実で速い麻雀は確かにのどかの得意とするところではあるが、同時にその場の状況にあつた打ち方をするのもまた彼女の持ち味のはず。

こんな序盤——それも十万点スタートのこの状況で、点数を下げてまで和了に行くのがのどかの麻雀だっただろうか？

どこか違和感を抱きつつ、次の局が始まる。

東一局・一本場。

親：原村和 101500

南家：竹井久 99500

西家：宮永咲 99500

北家：青山茂喜 99500

一本場。積棒が置かれたこの局もまた、のどかの独壇場だった。

開始早々に翻牌を鳴き、役を確定させるとそのまま久の捨て牌に手牌を倒した。

「ロン 2900は3200です」

……また手を崩しての安手。

撥ドラ一。デジタルで言えば今の局ののどかは本来、安牌かつ保険として〔撥〕を抱えながら手作りを進めていくのが常道。事実手牌の形はよかつたし、巡目と点数を考えればわざわざ手を崩してまで安易に和了を求めるなど普段ののどかなら決して行わない。

一体どういうことなのか——点棒を取り出しながら、久は気づかれない程度にのどかの様子をうかがう。

これまで部活ではほとんど見せたことのない、どこまでも張りつめた険しい顔。

安手とは言え二連続で和了ったというのに、その端正な顔が緩むことはない。

……やっぱりいつもののどかじゃないはね。

疑念を深めながらも点棒をのどかに手渡した時、彼女の目が自分に向いていないことに久は気が付いた。

……そう。そういうことね。

その視線の先にある人物を理解し、久は悟った。

まるで睨みつけるかのような強い意志の籠った瞳が向けられる先は、本日のメインゲスト。

……昨日やられたのがよっぽど堪えたみたいね。

つまるところ、先の二局はのどかなりの宣戦布告なのだろう。

もともとプライドの高い所があるのどかだが、こうまでではつきりとした敵対心を見せたのは咲の時からではないだろうか。

もつとも、久は対面で顔色一つ変えずに静かに手牌を倒す少年へと向けた。

……気づいていない……わけはないわよね。

ちらりと様子を窺っただけの自分は愚か、同卓を囲んでいる咲や離れた場所で観戦しているまこ達ですらのどかのただならぬ様子に気が付いているのだ。

こんな物理的なダメージさえ受けそうな視線を直接受けて気が付かないならば、最早鈍感を通り越して無神経のレベルだろう。

つまり、気付いた上であえて無視しているということになる。

それがまた癪に障るのかより一層のどかの顔が険しくなり、いつになく乱雑な動きで百点棒を新たに重ねた。

「東一局、二本場です！」

東一局・二本場。

親：原村和 104700

南家：竹井久 96300

西家：宮永咲 99500

北家：青山茂喜 99500

開始早々親が連荘しての二本場。

安手のために点数的な差はさほどついていないが、それでも何となく出鼻を挫かれたという感覚はぬぐえない。

そしてそんな久の感覚を裏付けるかのように、

「リーチー」

開始から八巡目。

先の二局の勢いがそのまま乗り移ったかのように、のどかが牌を曲げた。

……また速攻。

後輩の気合の籠った宣言を聞き、久は山に手を伸ばした。

引いたのは薄いと思われていたカンチャンの「三萬」。

これで一向聴。

……でも、手が進んだのはいいけど……

逆に困ったと久は顔を顰めた。

手成りに進めてきた結果、今の久の手牌は平和と二三四の三色が見える良形。

どちらかと言えば最初は見に回ろうかと思っただけに、予想外に良い手が入る形

となつたのは嬉しい誤算。

しかしかと言つて、一向聴で親リーに勝負できるかと言われれば正直難しい。

幸いにも余り牌の一つがぼぼぼ安牌であるために次巡まで今の形を維持できるが、次に有効牌を引いてももう一方の余り牌である「八索」は、恐らくのどかの本命である断幺九平和系統の危険牌。

……これは降りね。

もともとこの対局は久自身がトップを取ることを目的としたものではないのだ。

手を抜く気はないが、かといつて無暗に危ない橋を渡る必要もない。

とりあえず一向聴を維持しつつも、久は降りることを念頭に置いた安牌切りを選択。

常識的、一般的に正しいと言われる選択。

しかしその久の常識を出迎えたのは、対面からの非常識だった。

「カン」

……えっ？

久の捨てた「九萬」に対し、対面に座る青山が自身の手牌から同じ牌を三つ倒す。

「九萬」の大明槓。

親リーに対し、ドラでもない牌を槓——それも大明槓というセオリーガン無視。

……これって。

これまで部屋で何度か見たことのあるその光景に、久の目は自然と咲を追っていた。久の目に映った咲の顔は対局当初とさして違いはない。

幽霊に怯える幼子の様な不安と恐怖の入り混じった暗い表情、ただどことなく困惑の成分がそこに加わったように見えなくもない。

青山は王牌から嶺上牌を引き——そのままツモ切った。

……嶺上開花じゃない？

拍子抜けとでもいうのだろうか。

普段、咲の嶺上開花を見慣れているだけに槓をして和了らないという状況に少し違和感を覚える自分があることに久は気が付いた。

……随分感覚がマヒしてゐるわね。

普通に考えれば嶺上開花など早々起きることではない。

いけないいけないと心の中で首を横に振るが、同時に疑問が首をもたげてくる。じゃあ、なぜわざわざ槓したのかという疑問が。

……新ドラは〔九萬〕。

すなわちドラ四。

槓材にドラを乗せたことは確かにすごいが、その一方でリーチをかけたのどかの裏ドラを増やす結果にもなっている。

どことなく片手落ちの感は拭えない。

……とはいえ、これで青山君は満貫以上が確定。

この親リーがかかった状況で大明積をしたこと、そして先程久が危険と感じていた八索をノータイムでツモ切るあたり、既に張っていると考えるべき。

……役はチャンタ——にしては幺九牌が河にあるから、対々か役牌といったところか
しらね。

最早久の中に勝負の色はなかった。

いかにして二人の待ちをかわすか、そのことにみを念頭に置いて迎えた次順。

……引いちやったわね。

あつさりど、欲しかった〔四筒〕を引き入れる。

これで〔二筒〕〔五筒〕待ちの聴牌。

勝負に行きたい時にはどれだけ願っても引けないのに、降りたいと思つた時には簡単に引けてしまう。

麻雀ではよくあることとはいえ、唇の端から苦笑の一つも零れるというもの。

……まあ、零れたらラツキーってところかしらね。

張りこそしているが、〔五筒〕で和了れば平和のみの安手になってしまふこの状況では

リーチなどかけられるわけがない。

聴牌しつつも、少しでも危ないと感じたら即座に降りるつもりで安牌となった（八索）を河に置く。

「ポン」

……えっ？

再び、久は呆気にとられた。

先ほどは三つ、今度は二つと数こそ違えどまた対面の手牌から牌が倒される。

……自分が捨てた牌を鳴いた？

はつきりいつてわけがわからない。

鳴くぐらいなら、どうしてわざわざ暗刻を崩したりするのか。

久だけではない、青山を除くその部屋にいた全員がその理解できない打ち筋に呆気にとられながら、番はのどかへと移る。

こんなデジタルをガン無視した、悪ふざけとしか見えない打ち方が気に入らないのだろう。のどかは仄かに頬を紅潮させながら山から牌を引き、目当ての牌でなかったことを確認すると少し眉を顰めてそのまま河へと置いた。

……えっ？

そして三度、久は同じ反応を繰り返す。

のどかが置いた牌は〔二筒〕。

思わず、久は手牌を倒していた。

「えつと……ロン」

平和三色 3900 (二本場で4500)

親：原村和 99200

南家：竹井久 101800

西家：宮永咲 99500

北家：青山茂喜 99500

和了つたと言う感触は全くない。

和了るつもりはないのに気が付けば和了っていたというのは麻雀を打っていれば偶にあることだが、今のは。

……和了らされた？

誰に——など言う必要もない。

正面、静かに牌を卓の中央に空いた穴に落としている少年、青山茂喜。

……あの二つの意味の解らない鳴き。

麻雀と言うゲームにおいて鳴きという行為は本来リスクなものだ。

手を晒し、点数を下げ、選択肢を減らし、安牌を減らす。

それでも鳴くのは、少しでも和了りやすくするために他ならない。

そういう意味で言えば、先程の青山の行った二つの副露は0点だろう。

無駄に手牌を晒し、リスクを増やしただけのバカ鳴き。

しかし、もしもあれが『青山自身』が和了るためのものではなく、『他人（久）』を和了らせるためのものだとしたら。

ある程度巡目が進めば、他人の手牌の形も見えてくる。

上級者になればなるほどその読みは早く鋭くなり、相手の待ちを見抜いて差し込むという行為もプロの世界では決して珍しくない。

……でも。

それはあくまでも『自分の手牌』から牌を送り込むからであって、ツモ順をずらすことで有効牌を『引かせ』、更には『他人に』差し込ませるなど聞いたことがない。第一そんなことができるという事は、相手の手牌どころか山に何があるのかさえわかってい

……魔神……

ごくりと久は喉を鳴らす。

牌譜のデータだけではわからない、実際に相對してみても初めてその得体の知れなさが

わかる。

卓上に嵐が吹き荒れようとしていた。

第六話

I

東二局、東家竹井久。

先程までの速い展開とは打って変わり、この局は非常にゆっくりとした展開を見せた。

特に何の動きもないまま終盤を迎え、十三巡目にのどかと青山が互いに一回ずつ鳴きあつたものの、結局それらが和了に結びつくことはなかった、

最後の捨て牌が久の指から離れると、全員手牌を伏せた。

「ノーテン」

「ノーテンです」

「えっと、ノーテンです」

「……ノーテン」

結局何事もなくこの局は流れた。

親番であつた久が聴牌できなかつたため、親は咲へと回る。

東三局

西家：原村和 99200

北家：竹井久 101800

東家：宮永咲 99500

南家：青山茂喜 99500

ドラ：〔七筒〕

……開始からこれで四局目。

配られた手牌に目を落としながら、久は昨晚の間に調べた青山茂喜の牌譜を思い出す。

インターミドルを二度制しているだけあって牌譜の量に困ることはなく、またインターネット上にはその打ち方に対して考察しているサイトもある程度あった。

だが、それらのサイトが青山の打ち方をしっかりと分析できているかと言われれば、久としては正直首をかしげざるを得ない。

青山の牌譜は一目見ただけでも異常だとわかるのだが、咲の嶺上開花のようにはつきりとした特徴があるわけではないためその打ち方の実態は謎に包まれている部分が多い。

……今の所、青山君に対してわかっているのは三つ。

1. 最初の何局かは比較的安手で和了ることが多いということ。

2. ある程度の局数をこなすと怒涛の連続和了が始まるということ。

3. 後半になればなるほど火力が増すということ。

……牌譜を見た限りだと、連続で和了り始めるのはおよそ四局目以降。

つまり、そろそろということになる。

ネットでは一部で、あの宮永照の連続和了をすら凌ぐとさえ言われるそれ。

青山を敵に回すならば開始早々に勝負を決めなければならぬ。

それが青山と対峙する者の常識。

実際インターミドルで青山と闘った選手の多くがその戦法を取った。

……単純に勝率を上げたいなら、この情報をのどかと宮永さんと共有して速攻で勝負

を決めに行くのが正しいんでしようけど。

しかし、久はあえてそれを行わなかった。

理由としては、今回の対局は勝敗云々よりも対局の内容に重きを置いていることにある。

のどかと咲に植え付けられてしまった青山茂喜というトラウマ。

それを払拭するためには青山茂喜の全力に立ち向かって初めて達成できる、そんな考

えが久にはあった。

……危険な賭けであることに間違いはないけど。

もしかすれば更なるトラウマを二人に植え付けてしまう可能性もある。

しかしこれを取り越えなければ清澄に未来はないという確信が久にはあった。

……お願いだから二人とも、乗り越えてよ。

この後に待ち受けるだろう試練を思い、久は切に願った。

II

これから待ち受けるであろう困難に思いを馳せる久だったが、そんな彼女の予想に反して東三局は前局と同じく静かな立ち上がりから始まった。

局面が動いたのは局のおよそ中盤。

九巡目、それまでの局と同じくのだが口火を切った。

「リーチ！」

発声と共に〔一萬〕が曲げられ、千点棒が卓中央へと置かれる。

河から予想されるのどかの手は平和系。

リーチまでの牌の切り方から考えれば、〔二萬〕〔五萬〕〔八萬〕辺りが濃厚。

勿論、そのことは久と咲もわかっている。

リーチ直後ということもあり、二人は無難に安牌切りを選択。

しかし次番、青山は引いた牌と手牌の一つを入れ替えると躊躇なくその危険牌である

「二萬」を切った。いきなりの危険牌切りに久と咲に驚きの表情が浮かぶが、のどかは僅かに顔を顰めるだけで手牌を倒すことなく山へと手を伸ばす。

リーチをかけたものは和了牌と槓材以外はそのまま捨てなければならぬ。

そのルールに従い、のどかはツモった牌を確認するとそのまま捨て牌へと置いた。そう。それが全ての始まりだった。

「ポン」

のどかの捨てた「北」を青山が鳴く。

青山の手牌から二枚の「北」が晒され、のどかの捨てた「北」と共に青山の手牌の右側に晒される。青山が鳴いたため順番が巻き戻され、もう一度のどかが山から牌を引く。

そしてそのツモでも和了牌を引けなかったため、ルールに従いまた河へと牌が置かれる。

「ポン」

「なっ」

今度は「九筒」。少なくなった青山の手牌からまた新たに二つの牌が晒され、北の上に新たに三つの牌が重ねられる。

そして再度順は巻き戻る。

のどかはまさかと小さく唇を動かし、引いた牌を捨てた。

「ボン」

「つつー！」

三度目は（九萬）。

さらに少なくなつた青山の手牌からまた二つの牌が晒される。

これで三副露。

とは言え、三副露自体は決して珍しいものではない。

半荘を打つていれば数回ぐらいは必ず出る、そんなありふれたもの。

しかしそれが同巡以内、それも同じ人物から三度続けてとなると話は変わってくる。

単なる偶然で早々起きるようなことではない。

かと言つて狙つてやつたとすれば、青山は予めのどかの捨てる牌をわかつていたことになる。

「そんなオカルト……！」

ありえませんがのどかは力強く牌を引く。

それで和了ることができれば全て終わりだといふかのように。

「つつー！」

しかしのどかは引いた牌を確認すると眉を顰め、ゆつくり河へと置いた。

「ボン」

そして四度、静かな発声が卓を揺らす。

それまでと同じく、青山は僅か四枚になった手牌から二枚の（九索）を晒した。

打牌後、のどかの河に置かれたばかりの（九索）が青山のそれと共に九枚の牌の上に重ねられた。気負いも感情の揺れも感じられない、淡々とした動作。

これで四連続副露。

卓には異様な空気が立ち込めていた。

ルールに従い、四度順番はのどかへと戻る。

戻ってしまう。

「（こんなことって……）」

そこに先程までの強気な原村和はいなかった。

のどかは絶望にも似た声を零しながら、まるで祈るかのように山から牌を引いた。

しかしその牌を見た瞬間、のどかは唇を噛みしめた。

リーチをかけたものは和了牌と槓材以外はそのまま捨てなければならぬ。

力なく牌が河に置かれる。

そしてそれと被さるように、青山は牌を倒した。

「ロン」

混老対々三色同刻 12000

西家：原村和 86200

北家：竹井久 101800

東家：宮永咲 99500

南家：青山茂喜 112500

青山の跳満直撃により、それまでほぼ平らだった点数に若干の開きが生じる。

とは言え、一位の青山と最下位ののどかの間でさえその点数差は3万弱。

まだ東場と言うことを考えれば勝負はこれからと言うところ。

だというのに、点数差以上の何かが三人の少女に重く押し掛かっていた。

「東場オーラス……」

それまで必要最低限の発声しかしてこなかった青山が声を漏らす。

決して大きくない、囁くような音量だというのに卓を囲んでいた三人の耳にははつきりと届いた。

少女達が顔を上げると、青山は賽を振った。

III

清澄高校麻雀部部室。

麻雀部唯一の自動車が設置された部屋の中央で殺伐とした試合が行われる中、それを遠巻きで観戦していた麻雀部唯一の男性部員である京太郎がおもむろに口を開いた。

「なあ優希」

「なんだじえ、京太郎」

「明日の昼食だけどき、俺の代わりにレディースランチ頼んでくれねえ？」

「ええ。面倒だじえ」

「頼むよ。明日のすつげえ美味そうなんだけど、咲の奴頼んでも引き受けてくれねえんだよ」

「うーん。タコス奢ってくれたら考えるじえ」

「げっ。こいつ、人の足元見やがって……」

「あんたら一体何の話しとるんじや」

後輩のやり取りを見ていたまこは、呆れたとばかりに額を抑えた。

先輩の言葉に京太郎と優希はそれまでのやり取りをピタリと止め、二人揃って不安げな瞳でまこの顔を見つめた。

「染谷先輩……」

「現実逃避しとらんと、しつかり対局を見んしやい」

「いや、だつてな」

「だじえ」

対局から蚊帳の外に置かれた一年生コンビは互いに頷き合うと、その惨状を改めて確認した。

東四局 四本場 八巡目

東家：青山茂喜 205300

南家：原村和 64900

西家：竹井久 68900

北家：宮永咲 60900

まるで目を疑いたくなるような光景が二人の前に広がっていた。

優希と京太郎は一応互いの頬を引っ張り合い、それが夢でないことを確認する。

「跳満、倍満、跳満、満貫、三倍満で五連続和了……」

「一番低いのも満貫とか、エニグマティックすぎるじえ」

そう言っている間にも、また青山が手牌を倒した。

倒された牌は全て萬子。

一から九まで全て綺麗に揃ったその手に、優希と京太郎は顔をひきつらせた。

「これで六連続……」

「しかも役満……純正九連とか初めて見たじえ」

「……たしかそれって、役満の中でもかなり難しい奴だよな？」

「だじえ」

「別名天衣無縫。生涯で一回でも和了したらええ方で、和了したら死ぬっちゅう迷信もあるくらい難しい役満じゃ」

まさか生で拜める日が来るとは思わなかったと、まこは若干興奮気味に眼鏡の位置を直すと美しすぎる役満を凝視する。

京太郎はまこの解説に一層顔をひきつらせた。

「染谷先輩。あいつ、ほんとと一体何者なんですか？ あの三人が手も足も出ないとか、俺信じられないんですけど」

「同じ一年にあんなのがいるとは、私も知らなかったじえ」

「ワシも全てを把握しとるわけじゃないんじやが……あんたら、昨年インターミドルチャンピオンの名前は知つとるかいの？」

「えっ？ そりゃあ」

「のどちゃんだじえ！」

当然とばかりに即答する優希に、まこは苦笑を零す。

「女子はそうじゃの。じゃあ、男子は誰かわかるかの？」

「男子っすか？ えっと。確か前に優希と一緒に読んだ雑誌に、のどかの記事と一緒に

載ってたから見たはずなんすけど……」

「京太郎はのどちゃんのおっぱいしか目に入らなかつたから、男の名前なんて覚えてないんだじえ」

「うるせえ！　じゃあお前は覚えてるのかよ？」

「私はもともとのどちゃん一筋！　男の名前なんて憶えてるわけないじえ！」

「いや、威張るようなことじゃねえし」

「全くあんたらは……」

放っておけばすぐにじゃれ付きあう凸凹コンビの仲の良さは、呆れを通り越して関心すらまことに抱かせた。しかしこのままではいつまで経っても話が進まない。

まこはパンパンと二度軽く手を叩いた。

「はいはい、そこまでにしんしゃい。これじゃあ話が進まんじやろが」

「うっ。すみません」

「ごめんなさいだじえ」

「それで答えは出たかいの？」

「いや、思い出せてはいないんすけど……染谷先輩がその質問をするってことはつまり……」

「じゃけえ。あそこに座つとる青山茂喜が男子部門のインターミドルチャンピオン

じゃ。まあ、うちの学校の生徒だったとは知らなかったがの」

ほえーと言った表現が似合いそうなほど感心した顔で、京太郎と優希は卓で無双を続ける青山茂喜の顔を改めてまじまじと見つめた。

しかし京太郎はすぐに「うん？」と首をかしげると、まこへと視線を戻した。

「けど染谷先輩。青山がインターミドルチャンプなのはわかりましたけど、男子と女子ってそんなに力の差があるもの何ですか？」

「そうだじえ！ のどちゃんも同じインターミドルチャンピオンなのに……」

男子と女子。

性別による部門の違いこそあれど、青山茂喜と原村和は共に同じインターミドルチャンピオン。にもかかわらず、対局においてこうまで差が付くのはなぜなのか。

昨夜自分が抱いたのと同じ疑問に、まこは「あー」と癖毛で覆われた頭を掻いた。

「そのことじゃが……正直言つて、単純に青山がのどかよりも強かったとしか言いようがないの」

「それって答えになってないんじゃないか……」

「まあ聞きんしゃい。男子と女子は競技人口こそ倍近く違うが、実力的にはそう変わりやあせん。実際トッププロには女流雀士も多いからの」

特にまこ達の世代に関して言えば、今の女子のインターハイチャンピオンが圧倒的すぎる

お蔭で男子よりも強いという噂さえあるほど。

「インターミドルに関しても、数こそ違えどレベル的には然程大きな違いはないとワシは思つとる。仮にのどかが男子部門で出場してたとしても、女子の時と似たような結果になつたじやろう」

「だつたら……」

「じゃから男女の差じゃないんじや」

まこの脳裏に浮かぶのは、青山茂喜に関する様々な伝説。

昨晩行われた圧倒的すぎる対局に、今目の前で行われている蹂躞劇。

男子と女子の違いとか、競技人口の違いとかそんな小さなことではない。

「単純に『青山茂喜』という人間が圧倒的に強かつた。ただそれだけのことじや」

第七話

I

東四局 五本場 四巡目。

まとまらない手牌に目をやりながら、久は重い息を吐いた。

……わかつているつもりだったってことかしらね。

久は自分が青山茂喜という存在を見誤っていたことを悟った。

彼の力が今の自分達よりも上だというのは、彼女とて最初からわかっていた。

だからこそその大会ルールにかこつけた、持ち点十万点と言うルール。

しかし、安全ネットとして設けたはずのそれが今や見る影もなくなっていた。

東四局 五本場

東家：青山茂喜 2 5 4 5 0 0

南家：原村和 4 8 5 0 0

西家：竹井久 5 2 5 0 0

北家：宮永咲 4 4 5 0 0

……酷い点数ね。

普通の25000点持ちの麻雀ならとつくの昔に飛んでいる。

今はまだ5万点と言う点数を保持しているが、このまま行けばあと数局でそれも消えてしまおうことを久は理解していた。

……こんなことなら飛びなしのルールにしておけばよかつたかしら。

一瞬そんな後悔が脳裏を過つたが、すぐに無駄だと悟る。

飛びなしになった所でマイナスが増えるだけで、状況が好転するわけではない。

またそんな違和感バリバリのあからさまなルールにしては、プライドの高いのどかが反発しただろうことが部長である久には容易に想像できた。

久はこの対局の主役である、左右の席に座る二人の様子をうかがつた。

最初は対照的な顔を見せていた後輩たちは、今や同じような有様だつた。

上家に座るのどかは対局当初のような気力は感じられず、ただただ悔しそうに少なくなつた点数を見つめ自分のスカートを強く握りしめている。一方下家に席を置く咲は暗かつた表情に更に影が差し、牌を引く時以外はひたすら俯いていた。

そこに対局前に期待していたような光景はなかつた。

……全ては私の想定の甘さが招いたことね。

浮かれていたのかもしれないと、久は思った。

高校最後の年に新入生が四人も入り、咲とのどかという可能性に溢れた二人を見て半

ば諦めかけていた全国の夢を見れるようになった。

“あの二人ならきつと何とかできる”

そういう想いがあつたからこそ、久は青山茂喜を連れてきた。

例えトラウマがあつたとしても、のどかと咲ならば対局を行う中できつと前を向いて乗り越えることができるはず。

そんな信頼と呼べば聞こえのいい盲信がこの状況を招いてしまったと、久は己の浅慮に唇を噛みしめた。

……本当ならこうならない様に私がサポートするはずだったのに。

青山茂喜の強さが自身の想定を超えていた場合、後輩達が潰されぬようサポートするために久は卓に入った。

いや、その筈だった。

……まさかこうも何もできないとはね。

青山の親を流すために鳴いて安手の聴牌を作れば、あつさりと同巡に面前で倍満をツモられる。何とか流れを変えようとのどかに差し込んでみれば、まるでわかつていたかのようにその差し込んだ牌で和了られる。

青山の親番が始まってからこれまでの五局、結局久は何一つできることなくただただ点棒が減っていくのを黙って見ているしかなかった。

そして今も。

「リーチ」

青山のリーチの声に、一年生コンビはびくりと体を震わせた。

やはり手を緩めてはくれないかと、久は再度手牌に目を落としたり。

……配牌からほとんど変わらない四向聴。

捨てた牌が通ったことに安堵の息を漏らすのどかを横目に入れ、久は山に手を伸ばす。

引いてきたのは手の変わらない不要牌。

……形も悪ければ伸びそうな気配もないわね。

降りるといふ考えが彼女の頭を過る。

幸いというべきか、例えまた役満をツモられたとしても誰も飛ぶことはない。

最悪のケースとしては咲かのどかが青山の役満に放銃してそこで飛び終了となることだが、下手に久が動いて代わりに振り込んでしまつてはあまり意味がない。

薄いとはいえこのまま青山が和了牌を引けずに流れる可能性がある以上、ここは咲かのどかが振り込まないことを願いつつ次局の配牌に期待する。

……常識的に考えればそれが正しいはず。

久の指が手牌の中央、対子となつた〔六萬〕にかかる。

〔六萬〕は青山の現物。

手は崩れるが、その代わりに二巡の猶予を得ることができる。

細い指先が〔六萬〕を持ち上げる——途中で、ピタリとその指が止まった。

同時、これまで役満を和了つても何ら反応を示さなかつた青山の眉が僅かに動く。

……本当にそれでいいの？

——常識的に考えれば正しいのかもかもしれない。

——けれどその常識でこの現状を変えることができるのか？

——今の自分では青山茂喜に勝つどころかのどかと咲のサポートさえ出来ない。

——精神状態がどん底にある二人には、きつとどんな言葉をかけた所で届きはしな

いだろう。

——なら今私が二人のために出来ることは何？

しばしの逡巡の後、久は牌から指を離すと大きく息を吐いた。

「——よしっ！」

乾いた音が卓に響いた。

突然の音に思わず咲とのどかが顔を上げると、そこには痛みに呻きながら両頬を手の

平でおさえる久の姿があつた。

「いたたた……自分で叩いたら痛くないって聞いたことあつたけど、十分痛いじゃない」

「ぶ、部長？」

「——でもまあ、お蔭で覚悟がきまったわ」

久は自分の手牌にあらためて手をかけた。

しかし指先が向かったのは中央ではなく、手牌の一番右端。

手を進めていく上で必ず切らなければならないが、まだ場に一枚も出ていない超危険牌。

不要な牌の中にはもつと安全なものもあった。

けれどあえて、久はその牌を選んだ。

河へと置かれた牌から久の指先が離れる。

青山からの和了宣言はなかった。

ふつと久は正面に座る人物に笑みを浮かべた。

「さあ。勝負と行きましょう、青山君」

II

麻雀における素人と玄人の違いは何か。

そう尋ねられた時、多くの雀士は“守り”の差だと答える。

麻雀は運の要素が強い競技。

引きが良くなければどれだけ経っても和了ることは出来ず、逆に引きが良ければそれこそ配牌の段階で勝負が終わってしまふ。

牌効率を重視した打ち方によって多少なりとも和了率を上げたとしても、その本質は変わらない。麻雀が運の競技と言われる理由でもある。

しかしそんな「攻める」ことに関しては運の要素が重要になる一方で、逆に「守る」ことに関しては実力の差が顕著に表れる。

捨て牌はもとより手出しかつモ切りの違い。

更には僅かな視線の動きと言った卓外の事柄までも考慮に入れて相手の待ちを読み、振り込まない。全ての局を和了ることが現実的に考えて不可能である以上、いかに振り込まずに失点を最小限に抑えられるか。

それこそが麻雀の勝敗を分かっポイントであり、また全ての局を和了ろうとする素人と玄人の差でもある。

その観点から見た場合、竹井久は間違はなく玄人の部類に入る。

原村和の様に詳細な確率や期待値から計算するわけではないが、場の状況によって柔軟に対応できるその能力の高さは同年代の中でも光るモノがある。

悪待ちなどセオリーを無視した打ち方を好むにもかかわらず、失点が少ない。

それこそが久の強さの要因の一つ。

だというのに、

「ロン 11600の6本場で13400」

「つつー！」

久の指が捨て牌から離れると同時に、作業染みた発声と共に青山がその手牌を倒した。タンピンドラドラという、至極ありふれた和了形。

随分と軽くなった点棒ケースに久は一瞬顔を顰めたものの、すぐにふつとまた笑みを浮かべた。

「さあ。次に行きましよう！」



「……部長一体どうしちゃったんですか？」

続けて二度の放銃をしながらも笑顔で次の局を催促するのは先輩の姿に、京太郎は困惑の表情を浮かべ素直に自分の思ったことを口にした。

そしてそれはまた対局を見めていた他の二人も同じ。

まこと優希もまた、声にこそしなかったが少なからず京太郎と同じような表情をしていた。

「今のも無理に行くようなところじゃなかった……ですよね？」

席順の関係から京太郎達がいる場所からは久の手牌が見える。

だからこそ、その不可思議な打ち方もまた三人にははつきりとわかった。

未だ初心者の域を抜け出せていないためにイマイチ自信なさげな京太郎の疑問に、まこは「じゃけえ」と頷いた。

「有効牌の少ない二向聴。いくら点数差があるつちゆーても、聴牌気配がある相手に勝負に行く形とは思えん」

「さっきの局もリーチ一発目にいきなり危険牌を切つたと思つたら、その次も無筋のど真ん中を切つて満貫の放銃……普段の部長ならありえないじえ」

「……もしかして点数差が開き過ぎておかしくなつたとか？」

「京太郎」

「うっ。すいません」

先輩に対して礼を逸した発言をしたという自覚はあつたのだろう。

じろりとメガネのレンズ越しに見咎められ、京太郎は素直に謝罪した。

怒られて少し小さくなつた京太郎とそれを冷やかす優希の姿をレンズの端に捉えながら、麻雀部唯一の二回生はまあそう思つても仕方ないかと嘆息した。

普段ではまず見ないような安易な放銃を二度続け、点数は既にいつ飛ぶかもわからぬ危険域に入っているというに尚も笑顔のまま。

傍から見ているれば、心が折れてしまったと思うのも当然というもの。

……じゃけど、あんたはそんな軟やないやろ？
まこは知っている。

久の強さを。部員のいない麻雀部をここまで立て直した竹井久の強さを、染谷まこは誰よりもよく知っていた。

……いったい何を考えとる？

この二局、久が行っていたのは超攻撃的な打ち方。

ただただ和了るための、リスクを考えない神風特攻。

直撃を受けても笑って前を向くその姿はまるで誰かに見せつけているようでもあつて――

……つて、まさかアンタっ!?

III

……まこは気付いたみたいね。

背後で親友が息を呑んだのを察し、久は口元に小さく弧を描いた。

青山茂喜の独壇場で迎えた東四局は既に七本場目。

トップとラスの点数差は優に20万点を超え、最早一方的というのも憚れる虐殺シヨーへと変貌している。

……私の残りの点数は約2万5千点。

一般的な半荘での持ち点とほぼ同じ。

今からでも遅くない。

守ることに徹すれば、無茶な打ち方を辞めれば少しは延命できるのかもしれない。

けれどそれは迎える終わりがほんの少し後に伸びるだけ。

だからこそ、持ち点が四分の一になってもなお久は前に出ることを選んだ。

後に、託すために。

……ふふ。さつきから二人とも有り得ないって顔をしてるはね。

自分が牌を捨てる度に顔色を変える後輩達に内心で苦笑する。

特にデジタルな打ち方を好むのどこから見れば、今の久の打ち筋は狂気の沙汰だろう。

危険を顧みず和了ることだけを、前だけを向いた打牌。

……二人とも気付いてくれるかしら？

手牌から切った牌に自身の想いを込める。

五巡、六巡と自分の番が巡ってくる度に腕は重くなる。

もしかしたらもう青山が張っているのではないか、本当にこんな危ない牌を切っているのか、次に振り込めば飛んでしまうのではないか。

冷静なもう一人の自分が止めると叫ぶ。

そんな声を無視して、久は余分となった〔三萬〕を河へと捨てた。

「ロン」 12000の7本場で14100」

東4局だけで8連続、その前から合わせれば都合9連続となる青山の和了。

対面で倒された手牌を確認し、久は自分の手牌へと視線を落とした。

……少し間に合わなかったわね。

一向聴だった手牌を伏せ、また笑顔で次の局を迎える。

東4局8本場

東家：青山茂喜 295500

南家：原村和 48500

西家：竹井久 11500

北家：宮永咲 44500

相も変わらず、この局もまた久の手牌は良くなかった。

手の作りやすい中頃の牌に欠けた、横への伸びが期待し辛い配牌。

横に伸び辛い分縦に期待が出来る么九牌の対子が3つあったが、そこから暗刻へと重ねていくのは至難の業。ドラも絡んでいない以上、七対子、状況によつては鳴いての対々といったところが現実的な落とし所だった。

けれどその時、久の頭にはぼんやりと別の絵が浮かんでいた。

一巡目。親である青山が牌を捨て、番は南家へ。

山から牌を引いたのどかは青山の顔色をうかがい、恐る恐るといった様子で河へと牌を置く。

そして何の反応もないことがわかると、ほっと豊かな胸を撫で下ろした。

最早そこにはいつもの強気なインターミドル王者、原村和の姿はない。

あるのはただただ無力な一人の少女の姿だけ。

……怖いよね、のどか。

心の中ののどかへと語りかける。そう、怖くない筈がないのだ。

久はそこで一度のどかから視線を切ると、今しがた引いたばかりの牌に目をやった。

山から引いてきたのは一見不要な（八萬）。

横も縦のつながりも見えない以上そのままツモ切りで問題ない、けれどあえて久はそれを手牌に残すことを選択し対子を切り崩した。

続くは北家、宮永咲。

対局が始まってからずっと影を纏っていた少女は山に手を伸ばすときだけ僅かに顔を上げたが、牌を切るとすぐにまた俯いてしまった。

まるで何かから逃げようとするように。

……恐ろしいわよね、宮永さん。

心の中で咲へと話しかける。そう、恐ろしくない筈がないのだ。

一巡目が終わり、番は再び青山へ。

二巡目以降の展開は一巡目同様静かなものだった。

特に誰かが鳴くこともなく、ただただ牌を打つ音だけが室内に響く。

けれどそれに比例して重くなつていく空気。

場が動いたのは12巡目。動かしたのは、やはり青山だった。

「リーチ」

投げられたリーチ棒、曲げられた牌に咲とのどかは身体を震わせた。

ただリーチをかけたただけだというのにこの怯え様。

……辛いわよね、二人とも。

そんな二人へと心の中で久は話しかけた。そう、辛くない筈がないのだ。

怖いだろう、恐ろしいだろう、辛いだろう、逃げ出したいだろう。

久自身がそうなのだ。

いくら才能があろうとも——否、なまじ才能があるからこそ、格の差を嫌でも痛感

するこの対局は二人にとってキツイものだろう。

もしかしたら、麻雀を止めたいとすら思っているのかもしれない。

……でもね二人とも。

山へと手を伸ばす久の顔はしつかりと前を向いていた。

才能の差なんかには、実力の違いなんかには屈するものかと、前を向いて笑っていた。

……勝負から逃げ出してしまえばそれ以上前には進めないの。

掴んだ牌の腹に指先をそつと当てる。

薄らと凹んだその感触に久は時が来たことを悟った。

……きた。

12巡目にして、竹井久もまた聴牌。

——青山に、追いついた。

……あとはどっちで待つか。

〔北〕を捨てれば〔二筒〕〔三筒〕待ちのシャボ、〔一筒〕を捨てれば〔北〕の単騎待ち。

どちらの捨て牌候補も青山の河にあるため、いずれを切ったとしても即当たることはない。判断の材料としては、現在久から見ると〔北〕は三枚そのありかが見えている一方で〔二筒〕〔三筒〕はまだ四枚しか見えていないということ。

単騎よりも両面が必ずしもいいという訳ではないが、それでも四枚VS一枚。

安手になる可能性があることを計算に入れても、期待値的には両面待ちの方が遥かに大きい。

迷うことのない場面。久もまた迷わなかった。

「リーチ」

牌を曲げる。指が牌から離れた時に久の河に現れたのは「一筒」。

竹井久、セオリ―無視の地獄単騎待ち。

勿論そのことを両隣の咲とのどかが知るよしもない。

知っているのは久本人と後ろにいる三人の後輩、そして――

「……なるほどな」

対面に座る青山が声を上げたことに久は驚かなかつた。

彼ならばわかつていても不思議はない、そんな妙な信頼にも似た確信があつたから。

場に二つのリーチ棒が向かい合ったことで――正確に言えば青山がリーチをかけ

た段階で咲とのどかは戦力外。

勝負は必然、青山と久の一騎打ちに絞られた。

……普通ならきつと負けるんでしょね。

持つて生まれた天運の差とでも言えればいいのだろうか。

完全なオカルトになるが、自分と青山との差を久はこの十局足らずで理解していた。

リーチ競争となれば九割九分、99%の確率で自分が負けるのだと久は本能的に感じ

取っていたのである。

……でも、今だけは負けるわけにはいかない。

例えば99%駄目でも、まだ1%の可能性が残っている。

ならば前を向いてそれに賭けよう、引き寄せよう。

そして後輩たちに示すのだ。

……諦めなければ。

二人がリーチをかけた次巡。

それまで神懸かり的な引きの良さを見せていた青山だったが今回ばかりは一発とは
いかず、引いた牌をそのまま河へと置いた。

続くのどかは完全に降り姿勢の安牌切り。想いを込めて久は山へと手を伸ばした。

……諦めなければきつと道は開けるということをつ！

久は理解していた。これがラストチャンスであることを。

ここを逃せば、次巡で青山に和了られるということを久は確信していた。

ゆえにその自模は運命の分岐路。

久は引いた牌の図柄を確認し、柔らかに微笑んだ。

「……応えてくれてありがとう」

想いは、届いた。

「リーチ一発ツモ！」

引いた（北）を台に叩き付け、手牌を倒す。

両隣から呆けた声を耳にしながら久は裏ドラを捲った。

「チャンタドラ一！ 12000は14400！ 6800、3800！」

青山茂喜 287700

原村和 44700

竹井久 26900

宮永咲 40700

点数だけで言えば未だ大差。

たかだか12000弱の跳満など大勢には何ら影響を及ぼさない微弱な誤差でしかない。

けれどその微弱な誤差こそが久の欲していたものだった。

まるで有り得ない物を見たかのように口を半開きにした後輩二人に、久は心の中でではなく実際に言葉紡いだ。

「諦めなければきつと道は開けるわ」

勝負は、南場へと突入する。

第八話

南一局 親：原村和

原村和 4 4 7 0 0

竹井久 2 6 9 0 0

宮永咲 4 0 7 0 0

青山茂喜 2 8 7 7 0 0

長きにわたって続いた東四局。

それこそ誰かが飛ぶまで続くのではないかと思われた青山の連荘は、竹井久の執念の和了によつて終焉を迎えた。

けれどこれで勝負が終わつたわけではない。

麻雀における半荘とは前半の東場、後半の南場に分かれた二部構成。

つまるところ、未だ勝負は折り返しを迎えたにすぎないのだ。

後半戦、南一局。起家である原村和は手元の起家マークをひっくり返すと、そのままサイコロのスイッチへと細い指を伸ばした。

二つのサイコロの合計は5。

それに従い各人は親であるのどかの山から手牌を自模っていく。

自模る順番の關係から必然的に誰よりも早く手牌を引き終えたのどかは、己の手牌を整理するとスカートに置いた手を強く握りしめた。

……24万3千点差。

切り下げれば24万点、切り上げれば25万点。

それがのどかと青山との間に立ちはだかる「壁」だった。

現状、前半を終えたのどかの順位は青山に次ぐ二位。

しかしそれが仮初めの——自分が勝ち取った結果によるものではなく、たまたまの偶然でしかないことをのどかは理解していた。

最後に久が一矢報いたものの、東場は文字通り青山の独壇場。

まるで他人の思考が読めるかの様に、山の牌が見えているかのような打ち方で青山は和了を重ね次々と点棒を積み上げていった。

……でも人の思考が読めるとか牌が見えるなんてそんなオカルト——

——そんなオカルトありえませんか

一体何度、対局中に心の中でその言葉を叫んだだろう。

原村和の麻雀は確率の麻雀。

より和了率の高い方を、期待値の高い方を選択し続ければ必然的に勝率は高くなるという至極まっとうな『常識』を突き詰めた打ち方。

そこには牌が見える、好きな牌を引ける、人の心が読めるなどといった常識外の『オカルト』など一ミリたりとも介在していない。

というより、のどか自身が信じていないのだから考慮に入れる余地すらある筈もない。

多少変わった打ち方、和了の仕方を目にしてもそれらはあくまでも偶然に過ぎないのだとのどかは信じてきた。

……でも。

昨夜の対局では五度、今日の対局では既に八度も青山はその通常では考えられない『オカルト』染みた和了を見せている。

一度ならば偶然で済むだろう。

二度続いてもまあ、そんなこともあるだろう。

三度、四度、五度続こうともものどかは偶然の偏りだと無理やり納得するだろう。

けれどそれが十度も続けばどうだろう。

偶然だと、納得できるだろうか。

……認めないと、いけないのでしょうか？

オカルトの存在を。

しかしそれは自分の麻雀を、原村和を否定するのと同義。

のどかは揺れていた。

青山茂喜という理外の怪物に触れ、己を信じるが出来なくなっていた。

……怖い。

ぶるりと、のどかは身体を震わせた。

高校生にしては余りにも発達の良すぎる胸が大きく上下に揺れ、ほっそりとした足が

小刻みに震えだす。悔しい気持ちがないわけじゃない。

だがそれよりも今は恐怖こそがのどかの心を支配していた。

震える体に鞭を打ち、原村和は己の手牌へと視線を落とす。

理牌を終えたばかりの十四枚の手牌。

ここから一枚余分な牌を選んで捨てる、それは幾度ともなく経験したことだとい

に。

……どれを切れば――

点差が開いているとは言え、無理に現実的でない大物手を作りに行くよりも堅実な手

で点数を重ねていった方がまだ逆転の可能性は高い。

普段ののどかであれば即座にそう判断し、平和・断幺九の芽を残した〔西〕切りを選
択しただろう。けれど今は、

……わからない。

何を切ればいいのか、どうすれば和了れるのか、どうやったら青山から逃げられるのか。
いつもなら簡単に判断できることが出来ない。

暗い闇の中に閉じ込められたような閉塞感。

しかしこのまま迷っているのは一向に対局が進まない。

とりあえず何か牌を切ろうと指を伸ばしたその時だった。

「のどか」

久から声がかかったのは。

「あなたは、あなたの麻雀を打ちなさい」

「部長……」

にこりと笑うと、それ以上久は何も言わなかった。

まるで伝えたいことはもう全部伝えたと言わんばかりに。

のどかは伸ばしていた指を牌から離すと、久を見つめる目を少し細めた。

……部長はすごいですね。

素直にそう思った。

打ち方そのものは到底のどかの受け入れられるものではなかったが、どれだけ振り込もうとも、どれだけ点数がなくなろうとも常に久は前を向いていた。

前を向いて自分の意地を貫き、そして最後には青山から一矢報いた。

勿論、それはあくまでも結果論であり和了れないまま飛ぶことも十分にあり得た。

また一矢報いたとはいっても、実際のところ無謀な攻めを続けたせいで点棒は増える所か大きく減っている。とてもいい打ち方とは言えない。

でもそれでも、原村和は竹井久を凄いと思った。

——諦めなければきつと道は開けるわ

諦めることなく自分の意志を貫き通した麻雀部の部長を尊敬し、そして少しだけ嫉妬したりもした。

……私にも出来るのでしょうか？

久みために、どれだけ打ちのめされようとも自分の麻雀を貫けるのかと、のどかは己に問うてみる。

——返ってきたのは不安だった。

自信がなかった。これまで比較的不自由なく育ったのどかには、この逆境を一人で乗り越えられるだけの自信も経験もなかった。

……せめてエトペンがいてくれたら。

今は学生鞆と共にある友人を思う。

まだ小さい頃に親が買ってくれたペンギンのぬいぐるみにして宝物。

ネット麻雀では常に自分の傍で支えてくれていたかけがえのない友人。

そう、せめてエトペンと一緒にならばいつものように自分の麻雀を——

そこまで考えて、のどかは背後を振り返った。

パソコン台の横。

荷物置き替わりにと、旧校舎の教室から拝借した複数の勉強机を並べて作られた平
台。

その上に置かれているのは、部員の学生鞆とそして——

「ちよ、ちよっと待ってもらっていいですか!？」

対局中に席を立つことがマナー違反であるのは知っていたが、背に腹は代えられな
かった。久がまず笑顔で、そして続いて咲が目を白黒させながらも小さく頷く。

そして卓の中で唯一の部外者である青山が最後に頷くと同時に、のどかは席を立つ
た。

礼儀正しいのどかにしては珍しくスカートのプリーツを乱して平台に駆け寄ると、可
愛らしい花柄の刺繍の入った袋を手にとった。

……エトペン。

袋から取り出した大きなペンギンのぬいぐるみを大事に抱きかかえ、席へと戻る。

部室中の視線が胸元へと集まっているのを感じながら、のどかは丁寧な顔を下げた。

「急に席を立つてすみませんでした。もう大丈夫です」

「えっと、それはいいんだけど……のどか。それってぬいぐるみ……よね？」

「はい。エトペンです」

「エト……ペン？」

久の頭上には？マーク。

いや、久だけではない。一緒に卓を囲む咲も傍から観戦している部員達も、そして果

てはあの青山でさえ目を白黒とさせていることにのどかはくすりと笑った。

……私はもう大丈夫ですよ部長。

一人だったら駄目だったかもしれない。

でも、今は一人ではなかった。

……エトペンと一緒にいてくれる。

たったそれだけのことで、のどかの心に広がっていた闇は消え失せた。

……見える。

さつきまではまるで見えなかった手牌の進むべき道が、ハッキリと見える。

それは自宅でネット麻雀を打っている時と同じ感覚。

外界からの余分な音が消え、自分の感覚が鋭くなつていくのがのどかにはわかった。数秒の思考の後、のどかは牌を握った。

……どれだけ点差があろうとも、私は自分の麻雀を貫きます！

〔西〕を捨てるその顔には、最早迷いはなかった。

II

「ツモ。1300オールは1400オールです」

南一局一本場。

引いた牌を優しくマツトに置き、のどかは手牌を倒した。

リーチ平和ツモの3翻20符。

安目を引いたために三色も断么九もつかず裏ドラも乗らなかつたが、それでも麻雀の教本に載っているかの様な綺麗な手だった。

青山茂喜は既定の点数を支払うと、僅かに眉を顰めた。

……これで二連続。

南場に入ってから連続となる原村和の和了。一見すれば東場の頭を思い出す何てことのない安手の連続和了だが、青山に言わせれば全くの別物もい所だった。

……流れに淀みがない。

東場の時の無理に流れを歪めて作った安手とは違う、場の流れに沿った自然な打ち筋での和了。恐らく和了った本人は気付いていないだろう。

ただ確率と期待値を計算した先に辿りついた結果としか考えてしまい。

だが確実に、今原村は場の流れと繋がりつつあった。

……『間』を狙われた形になったな。

呼吸と呼吸の間、流れと流れの間。

偶然とはいえその隙間を上手く突かれたと、青山は思った。

勿論、幾ら偶然とはいえ凡百の天運しか持たぬ打ち手にできることではない。

……原村和か。

青山と同じ、昨年のインターミドルの覇者。

男女部門の違いこそあるが同じ大会に出場していたことと、ちよつとした個人的な理由から青山もその名ぐらいは知っていた。

そして昨夜、とある偶然から共に卓を囲んで打った感想としては、

——なっていない。

その一言に尽きた。

持つて生まれた天運、強運を全く活かせていない。

人は平等ではない。

それは容姿や身体能力だけでなく、持って生まれた運にさえ当て嵌まる。

大抵は強運でも弱運でもないどっちかずの凡運を持って生まれ、それからあぶれた人間が弱運を、そして極々一部の選ばれた人間のみが強運を授かる。

その分類でいえば原村和は間違いなく強運の—— “持っている” 側の人間であると言える。ただ思いのままに打っていけばそれだけで勝ってしまえる、選ばれし側の人間。

だが原村和はその自分の才能を全くと言っていいほど引き出せていなかった。

ミスの多い中途半端なデジタルな打ち方で場の流れを乱し、自ら強運を鎖で抑えつけてすらいた。

しかし今は。

……完全なデジタルに徹することでその鎖を解き放ったか。

昨夜の対局、そして東場では見られていたイーजीミスや打ち方のブレが南場に入ってから全くと言っていいほど見られない。確立を重視したミスの少ない打ち方を徹底することで、自分の天運を前面に押し出した麻雀をのどかは展開しつつある。

……皮肉な話だ。

青山はそう心の中で呟くと、小さく鼻を鳴らした。

それは苦笑というより半ば冷笑にも近かった。

デジタル麻雀とは元来、持たざる者が少しでも勝率を上げるためのもの。

短期決戦における必勝の策を持たない凡人が、一局一局の密度を、熱を下げて終始機械の如く確立に任せることで何とか長期スパンでの勝ちを拾おうと編み出した苦肉の策。

だがそんな持たざる者のための打ち方を、“持っている側”の原村和が誰よりも信奉し徹底しているという皮肉。

……長期視点から見た場合、デジタルに徹すれば誰でも二割〜三割はトツプを取れるという。

それを運が強いのが行えば、それこそトツプ率にもう二割は上乗せできるだろう。平均的に安定して良い結果を残すという意味では原村和は間違いなく優秀。

……とは言え。

南一局二本場六巡目。

青山が捨てた牌にのどかが動いた。

「ポン」

鳴いた（中）を晒し、手牌の一番右端の牌に手をかける。

手が重く遅くなり、黙っていても期待値が小さくなるようなら積極的に動いて期待値

を少しでも大きくする。数字を絶対とするデジタルな打ち方ではよく見られる鳴き。

麻雀には正解はないとはいえ、確立と期待値に基づいた判断は客観的に見れば正しいのかもしれない。

しかしそれゆえに、ひどく読み易くもあつた。

「ロン 8000は8600」

のどかが牌を捨てると同時に青山が手牌を倒す。

断幺九三色ドラ一。

断幺九狙いの手でありながら直前までドラでもない中を抱えていたこと、両面で待たにもかかわらずあえてカンチャンで待っていたこと。

のどかの思考と手牌を読んでいたとしか思えない打ち回し。

だというのに、点棒を渡すその顔には東場に見せた動揺は欠片もなかった。薄らと顔を赤らめながら、どことなく焦点の合っていない瞳でただただ卓上を見つめていた。

……南場に入ってから場に対する熱を欠片も感じない。打ち方だけでなく、心まで完全な機械になったか。

青山をしても初めての経験だった。

のどかのようにデジタルな打ち方をする人間はいくらでもいた。

けれど内面までもデジタルに——完全な機械になつてしまう人間は誰一人として

見たことがなかった。恐らく今ののどかは例えどれだけ不可解な打ち回しを見ようとも、それこそ理不尽な負けを喫しようとも“そういうこともある”と平然と割り切り、受け入れてしまうのであろう。それは強みであるが、また同時に弱みでもある。

少なくとも青山はそんな相手に負ける気は欠片もなかった。

むしろと、対面でニコニコと手牌を眺めている自分をここへと招いた原因へ目をやる。

……悪くはない。

だが特別良くもない。精々が凡人に毛が生えた程度の天運。

多少なりとも効く勘で誤魔化して入るようだが、どう見積もっても原村和や自分のような“持っている”側の人間ではない。

しかし彼女、竹井久には原村和にはない一局一局に対する“熱”がある、想いがある。短期決戦ではそれが恐ろしい。

時としてその熱が差を、場を、流れを、実力を、天運をひっくり返すことがある。

事実、半ば弱まりつつあったとは言え青山が支配していた場から竹井久はその熱を持って和了を勝ち取った。そして折れかけていた原村和を立ち直らせ、その真の姿を呼び覚ます呼び水となった。

……少し、あいつらに似ているかもしれないな。

青山の脳裏に浮かぶは中学時代の記憶。

かつて、毎日の様に上級生のクラスに訪れては麻雀部に入ってくれと真つ直ぐな目で頭を下げてきた後輩達。恵まれた才能は持っていないが、たつた一つの目的を果たすためにと熱を持っていた麻雀部員達。

通りで対局を頼まれた時に断れる気がしなかったわけだと、青山は苦笑する。

……無意識の内に会長とあいつらを重ねていたってわけか。

我ながら女々しいことであつたが、不快ではなかつた。

元を正せば様々なしながらみから逃れるためにやって来た長野だが、そんな場所でも竹井久の様な熱を持った人間と出会つたことに青山は偶然以外の何かを感じざるをえなかつた。

……まあ、それならそれでいいさ。

どのみち、昨日あの雀荘に入った時からある種の運命は感じていたのだ。

それに比べれば、竹井久との出会いなど誤差レベルでしかなかつた。

南二局。最後の親番であるにもかかわらず、竹井久は既にやるべきことはやり尽くしたと言わんばかりに静観の構え。

5巡目。青山は当然の様に手牌を倒していた。

「ツモ。1000・2000」

原村和 45300

竹井久 21500

宮永咲 36300

青山茂喜 296900

満貫、跳満、倍満といったそれまでの怒涛の高火力に比べれば何て事のない安手。

ともすれば局を消化するためにも思えるその和了は場を流すためのものでもなければ、小刻みに点数を稼ぐためのものでもない。

それは息継ぎ。

一度は途切れた流れを再び引き込むための調整。

……さっきの満貫とこのツモで準備は終わった。

元より東場の段階で基礎となる土台は作り終わっていたのだ。

二局もあれば原村和の流れを断ち切り、再び自分に流れを引き込むなど容易に出来た。

次局からの青山は東場終盤のような仕上がった状態となる。

……このまま何もせず終わるのか、それとも何か魅せるのか……

お前はどつちだと、青山は問いかける。

その目は依然として俯いたままの、宮永咲へと向いていた。

第九話

南三局 親：宮永咲

宮永咲 36300

青山茂喜 296900

原村和 45300

竹井久 21500

長かった半荘もいよいよ大詰め、南場第三局。

山から四つずつ手牌をツモりながら、宮永咲は安堵していた。

……もうすぐ、もうすぐおわる。

現在の順位はラス親である青山が圧倒的大差をつけてのトップ。

この半荘は大会用のルールに沿って行われているため、ラス親による和了り止めが認められている。勿論和了り止めをせずにそのまま続行することも出来るが、賭けてもいなければ後に引き継ぐわけでもない対局で連荘する意味は皆無。

つまりこの南三局で親である咲が和了らない限り、いかなる結果になろうとも（それこそ青山が二連続で役満を振り込もうとも）後二局でこの半荘は終了する。

……長かったなあ。

現実の時間ではおよそ一時間足らずの出来事だというのに、その何倍にも長く感じられた。特に青山が暴れ回った東四局など、時間が止まっていたのではないかとさえ錯覚したほどだった。この時、咲には連荘して青山を捲つてやろうなどという気概は一切なかった。

ただただ速くこの対局が終わることを、嵐が過ぎ去ることだけを祈っていた。

……終わつたらすぐに家に帰つて——もう麻雀には関わらないようにしよう。

もともと咲は麻雀に対して良い思い出など殆どなかった。

勝てば怒られ、負ければお年玉を巻き上げられる嫌な儀式。

それでも咲が部に入つて再び麻雀を打とうと思つたのは、全国に行けば姉に会えると

——麻雀を通してちゃんと話が出来ると思つたから。

けれどこんな天災に遭つて惨めな思いをするぐらいならもう諦めてしまおうと咲は思つた。

……部も辞めて、また静かな生活に戻ろう。

きつとそれが一番の幸せなのだ。わざわざ傷つく必要などない。

部長や誘つてくれた京太郎達には申し訳なく思うが、所詮は元の鞘に戻るだけ。

……ごめんね原村さん。

下げていた顔を少しだけ上げる。

そこには一緒に全国に行こうと約束を交わした少女が座っていた。座つて、前を向いていた。

……やっぱり原村さんと部長はすごいなあ。

何度打ちのめされても笑顔を崩さず、後輩に道を示した竹井久。

一度は咲と同じ絶望を味わいながらも、己の麻雀を見つけ前を向いた原村和。

諦めてしまった自分とは違う、どこまでも前を向く二人が今の咲には眩しかった。

……私には無理だよ。二人みたいに強くはなれないよ。

なまじ才能があることが災いした。同じ“持つている”側であるがゆえに、咲には自分と青山の差がハッキリとわかってしまう。

……あれはもう人間じゃない。

人の姿をした何か。

それこそおとぎ話に出てくる怪物や、神話の神の類。

そういったものと同列なのだと、本気で咲はそう思っていた。

……この局が始まってからまた空気が重くなった。

昨夜雀荘で打った時の終盤や、先の東4局の時と同じ重圧。場に漂う大事な何かが根こそぎ奪われてしまった様な、遙か天空より見下ろされているような感覚。

まるで人が何をしようとも無駄なのだと言外に告げられているような虚無感。おまけに。

……青山君はまだ全力じゃない。

一応本気ではあるのだろう。まだまだ余裕こそ感じられるが、勝負に対する熱は紛れもなく本物。しかし本気ではあっても、決して全力ではなかった。

これまで青山が見せてきた力はあくまでも上澄みであり、その奥底にはもつと危険な“ナニカ”が潜んでいるのだと局を重ねる中で咲はおぼろげながらに感じ取っていた。事実、彼女には見えていた。時折、青山の背後に現れては消える影を。

青山と同じ、人の姿をした怪物。眼光鋭き白髪の老人の姿が薄らとではあるが咲には見えていた。そんな人外相手に勝負を挑もうなど、勝とうとするなど正気の沙汰ではない。

どれだけ科学技術が発達しようと大自然が一瞬にして全てを無に帰すように、大いなる存在の前では人間など取るに足らない矮小な存在でしかないのだ。

……私はなにもしなくていい。

親である咲以外の誰かが和了れば、それだけで場はオーラスへと移る。

後七巡か八巡、それだけあればまた青山は手牌を倒す。

それは最早確定事項。

だからそれまで咲はただただ縮こまっていればいい。

そのはずなのに――

「ポ、ポンです」

気が付けば声を発していた。

えっと思う間もなく、その手は勝手に動いていた。

手牌から泣く牌を晒し、余分な牌を河へと捨てる。

そしてのどかの河からとつてきた牌と晒した牌を合わせて卓の右側へ。

……な、なにしているんだろう私。

自分の行動に困惑する。周りから不自然に思われないう程度には手作りする必要があらうとは言え、わざわざ鳴く必要などない。その後も本人の意志とは反対に手が動いていく。

ツモ牌にも恵まれたことで気が付けば南3局が始まってから七巡目、咲は聴牌へと辿りついていた。

……なんでこうなるんだろ？

わけがわからなかったが、だからと言って手牌が変わることはない。

この時もまた本人の意識とは関係なく、手が一番右端の牌を掴んでいた。

{ 3 3 3 3 ④ ④ ④ ⑤ ⑤ ⑤ ⑥ }

{ 横 ⑦ } { ⑦ ⑦ }

安目なら1500、高目なら12000。

断么九確定の〔④⑤⑥⑦〕待ち四面張。

とは言え、ここまで手が出来上がっても尚咲は和了る気などなかった。

和了る気はなかったが、また先の様に手が勝手に手牌を倒してしまう可能性は拭いきれなかった。

……早く。早く誰か和了って。

そんな少女の祈りに応えたのは、皮肉にも畏れていた怪物だった。

「リーチ」

短い発声と共に千点棒が卓中央に置かれる。

本日何度目になるかわからない青山によるリーチ。

怪物の宣言に少女は安堵した。これで終わりだと。

あと一巡後には決着がつくのだと、咲はその曲げられた牌に目を向けた。

「あっ」

思わず声が漏れた。

青山が捨てたのは〔三索〕。

直接の和了牌ではないがそれは――

……積……できる牌。

II

……さあ。どうする？

リーチ宣言の後、青山は内心で呟いた。

鋭い目が向かう先は上家に座る少女。

目を見開き、声にならない声を上げてゐる宮永咲。

……大分牌が見えなくなっているみたいだが、それでもまだわかる筈だ。

自分に与えられた選択肢が。

……ここで見逃すようなら問題外。

投げかけたのは試金石。

わざわざ自分の手を遅らせてまで、青山は咲が聴牌するこの時を待っていた。

昨夜わざわざ見せつける様に嶺上開花で和了したのも、遠回りをしてまで槍槓を決めその心を完膚なきまでに叩き折ったのも、圧倒的な得点差をつけて絶望の淵に叩き落としたのも全てはこの一瞬のための布石。

……また会うことになるのは最初からわかっていた。

昨日、雀荘で出会った時から青山茂喜は宮永咲ともう一度打つことになるだろうと確信していた（まさか翌日だとは青山も予想していなかったが）。

それは近いからこそ感じる勘のようなもの。

青山と咲が同類——だとは言わない。

というより、青山茂喜と真の意味で同類、同族だった人間はもうとつとつこの世から消えている。けれど少なくとも同じ側の——それも比較的近い位置にいることは確かだった。そうでなければこの支配された場でこんな早く手を作れるわけがない。

ゆえに青山は試す。

宮永咲が本当の意味で自分と同じ土俵に立てる存在であるか否かを。

……感覚を研ぎ澄ませばわかる。本流へと続く道が。

少なくとも青山には見えていた。

咲の手が持つ可能性、王の道が。

……山に眠る嶺上牌は〔④〕、〔⑦〕、〔⑥〕。

つまり安目ならば1500、高目でも満貫であつた手は断么九、嶺上開花、対々和、三槓子がついて跳満にまで化ける可能性を秘めている。

それに辿りつけないようなら、宮永咲は魔神の敵になりえない。

けれどももしも辿りつけたその時は——

……お前は、俺の敵だ。



……ど、どうしよう。

青山の河に置かれた〔三索〕を前に、咲は動けずにいた。

……積すれば和了れる……のかな？

自信はない。普段ならばハッキリと見えている筈の山は、もう殆ど見えなくなつてしまつてゐる。唯一ぼんやりながらもわかるのは、王牌に眠る嶺上牌とそこから伸びる細い糸だけ。いやそもそも和了れるかどうか以前に、

……何で私、積しよう——和了ろうとしてるんだろ？

半荘を早く終わらせたいならここは何もしなくていい。

何もせずにただただ黙つていればいいはずなのに。

……何でだろう？ 胸が熱いよ。

ぎゅつと胸元の赤いスカーフを握りしめる。

さつきから嫌というほどに心臓が熱を帯び、その鼓動を大きくしている。

まるで、ここで動かなければ永遠に後悔するのだと咲に訴えるかのように。

……積……した方がいいのかな？

和了れる保証などどこにもないというのに。

いや仮に和了れたとしても、その先に待つてゐるのはより大きな絶望だけだというのに。

余り悠長に考えている時間はなかった。

もう間もなく、番が回ってきたのどかが山の牌に触れる。

そうなれば必然的にタイムアップ。

答えを出せず、咲はぎゅつと目をつぶった。

……お姉ちゃん!?

——咲。

——お前も山の峰に咲くような花のように強く——

何かが、吹っ切れた気がした。

目を開け、咲は手牌から暗刻を晒した。

「カン！」

〔三索〕大明槓。青山の捨てた〔三索〕と自分のそれを合わせた計四枚の牌を右へと滑らし、咲は王牌へと手を伸ばす。引いた嶺上牌は〔四筒〕。

和了牌であり、

「もいっしょカン！」

槓できる牌でもある。

少なくなつた手牌から更に牌を晒し、二枚目の嶺上牌を引く。

〔七筒〕。これもまた和了牌であり、そして槓牌でもあつた。

「もいっこカン！」

元より右側に積んでいた三枚の〔七筒〕にもう一枚加える。

昨夜の槍槓の恐怖が全くないわけではなかつた。

ただ今はどこまでも高く——山の頂まで登つていきたかつた。

二連続で嶺上開花を見逃しての加槓。その余りにも常識から外れた打ち回しは見ている者をどこまでも惹きつけた。咲が三枚目となる嶺上牌に手を伸ばす。

戻つてきた感覚では次に引くのは〔六筒〕。

つまり、手を決定づける和了牌。

これまでその感覚が外れたことはなかつた。

けれど——

……まだ……足りない。

感覚を拒絶する。

まだ登り切つてはいないので、まだ先があるのだと。

森林限界を超えた先、山の峰、その頂。

植物が生える筈のない場所で力強く咲き誇る花のように——

……私も咲き誇るんだっ!

引いた嶺上牌の腹に指を滑らす。

王牌から引いてきた嶺上牌は——〔六筒〕ではなかった。

〔五筒〕。4枚目の〔五筒〕。

満面の笑みを浮かべて咲は声を発した。

「もいっかん!!」

最後のカン。

四つ目の槓。

咲は最後の嶺上牌を引くと、当たり前の様にそれをマットの上へと置いた。

そして倒される手牌。

誰もが、息を呑んだ。

それは大三元や四暗刻などと部類を同じくする麻雀の最高手。

たった一人のプレイヤーが四つの槓を重ねた偉業に対して与えられる勲章。

その名は——

「ツモ。嶺上開花——四槓子。48000です!」

四槓子という役満。

この対局で採用されている大会ルールでは責任払いが認められている。つまりこの

役満は16000オールではなく、大明槇させた青山の一人払いということになる。

宮永咲 84300

青山茂喜 248900

原村和 45300

竹井久 21500

点数だけ見れば未だ大差。

けれど咲の顔にはもう暗い影はなかった。

前だけを、見つめていた。

……もう諦めない。全国に言って絶対にお姉ちゃんに会うんだからっ！

III

南三局に飛び出した大物手、四槇子。

それも完全無欠と思われていた青山への直撃は、部室内のムードを一変させた。

まだまだいけると、やれるのだといわんばかりの空気。

点棒の支払いを終えた青山茂喜は、半ば呆然としながら倒された上家の手牌を見つめた。

深い黒の瞳に映るのは動揺。

そう、この時間違いなく青山は動揺していた。

48000という莫大な点棒を失ったことに対してではない。

そもそも点棒などというのはあくまでも有利不利を具象化する秤でしかないのだから、それが多少目減りしたところで何ら意味などない。

故に驚いたのは点数などではなく、

……読み違えた？

自分の読みが間違っていたこと。

流れを支配し、完全に読み切っていたと思っていた展開が外れたこと。

……三枚目の嶺上は確かに〔六筒〕だった。

少なくとも咲が嶺上牌に手をかけるまでは間違いないそうだったはず。

しかし蓋を開けて見れば、三枚目の嶺上牌は〔六筒〕ではなく〔五筒〕。

そうして生み出された四槓子。

青山に見えていた王の道を超える、新たな道。

……見誤っていたということか。

人を。

宮永咲という少女を。

自分を基準にし、可能性は、限界はここまでだと勝手に決めつけてしまっていた。

彼女にはその一歩先の道が見えていたというのに。

それは青山茂喜の完全なる落ち度。

驕りが生み出した、反論の仕様がなない失敗。

……あの人ならきつとこんな初歩的なミスはしなかった。

青山が静かに膝元で拳を握りしめたその時だった。

世界が、モノクロへと変貌したのは。

色が消え、音が消え、時間が止まる。

あれだけ騒がしかった観客達の興奮の声は一瞬にして消え失せ、色彩を失った人間を
含むあらゆる物体は微動だにさえしない。

全てが静止した、まるでモノクロ写真の様な白と黒だけの世界。

そんな世界の中で唯一変わらずに色を保っていた青山は、背後に降り立った大きな漆
黒の影に顔を歪めた。

『カツカツカ。猿真似にも限界が来たようだな』

耳を通してではなく、脳内に直接届く声。

深い威厳と重圧に満ちた老人の声。

『お前とて初めからわかつていたのだろうか？ 人を測るなど、あの悪鬼の真似事など誰
にもできぬと』

老人は笑う。

愚かだと。

無駄な努力だと。

老人はどこまでも晒う。

『愉快愉快愉快。素直に受け入れてしまえば楽だというのにどうしてこうも愚かか』

……黙っている、亡霊風情が。

『凶星を突かれて怒ったか、うウン？　だがこれは親切から教えてやっておるのだぞ。ほれ、肉親には便宜を図るのが当然であろう？』

嘘をつくと、青山は内心で吐き捨てる。

この狂った亡霊が肉親だからと言う常識的な理由でアドバイスをするなど有り得ない。

単に、楽しんでるだけなのだ。

自分と同じ天に愛された人形がどこまでも無様に、愚かに踊り続けるのを観覧し悦に浸っているにすぎないのだ。

……とつと消えろ。

『カッカッカッ！　嫌われたものよのお。なら望み通りワシは消えるでしょう。しかし覚えておくといい。どれだけ取り繕い、誤魔化そうとも所詮それは張りぼて。本物とは

程遠い紛い物。お前は永遠にヤツにはなれぬ。なぜならお前の体にはこの鷲巢巖の血が流れているのだからなあ!』

そう言い残し、影は現れた時と同じように姿を消した。

動き出す時間。

全てが元に戻った世界の中で青山は苛立ち気に舌を鳴らした。

……確かに最初からわかつていた。

真似ることが出来ないというのは。

あの人の——赤木シゲルと同じことなど誰にもできはしない。

そんなことは青山茂喜自身が誰よりも深く理解していた。

理解してもなお諦めきれなかった。

追いかけたかったのだ、その背中を。

感じたかったのだ、同じ熱を。

深呼吸一つ、青山は顔を新たな「敵」へと向けた。

原村和のように見た者を振り向かせる華やかさはないものの、まだ幼さを残す可愛らしい顔立ち。姉妹だけあって、やはりよく似ていた。

……宮永咲。照の、妹。

青山の支配と予想を超えてきた、同じステージに立つ存在。

宮永照と同じく、いずれ自分と並び立つ可能性を持ちし者。

……今の和了で流れを全部持っていかけたか。

持ち前の豪運と場の調整によって無理やり呼び込んでいた流れの渦は、そっくりそのまま宮永咲へと流れ込んだ。決壊したダムの水はもう誰にも止められない様に、一度完全に流れが反転してしまえばそれを覆すのは難しい。

最早この状況においては多少の点棒の多寡などに意味はない。

判断を間違えば一瞬にして濁流に飲み込まれてしまうのみ。

……仕方ない。

不本意ではある。

しかしどれだけ不本意であっても、負けることだけは許されない。

それは誓い。二年前、青山茂喜が己に課した絶対の制約。

瞼を閉じて開いた時、青山が見る世界は再び色を失っていた。

……相変わらずつまらない世界だ。

赤木上げるといふ運命に出会うまでの、全てが色褪せて見える懐かしき世界。

河に映った人の心は愚か、それまで見えていた場の流れや山の牌さえ見えなくなるが何も問題はなかった。最早そんな些細な情報などに意味はないのだ。

これから行うのは憧れとは真逆。

羨望し、手を伸ばし続けていた場所とは正反対に位置するもの。

……インターミドルの決勝以来か。

それまで青山茂喜という檻の中で眠っていた怪物、魔神が目を覚ますのが手に取るようにわかった。流れる血液は熱く煮えたぎり、心はどこまでも冷めていく。

親である咲によつて振られる二つのダイス。

それをどこまでもつまらなげに、青山は見つめていた。

第十話

I

始まる、始まってしまふ南三局一本場。

この局、親である咲の配牌は非常に良かった。

暗刻と対子が重なり高目を狙えつつも早めの和了を狙える良配牌。

一方でそれとは対照的に、青山の手はそれまで続いていた好配牌がまるで嘘であるかのように悪かった。一つとして面子がないでバラバラ。

その分么九牌が手牌の半数近くを占めていたが、それとて五種六牌。

国士は愚か九種九牌にさえも届かぬ悪手、ゴミ。

けれどそんなゴミ手を見つめる青山の眼には何の感情も乗ってはいなかった。

怒りも悲しみも呆れも諦めもない、ただただ無機質。

まるで幾度となく見返した映画を見ている様などこまでもつまらなげな瞳で迎えた一巡目、青山の手番。青山は山からツモった牌を自分の手牌に加えると、そつと十四枚ある手牌の内の半分を伏せた。意味の解らぬその動作に同席していた者達が少なからず困惑の色を浮かべる中、青山は伏せていない七枚の内一枚を河へと置いて呟いた。

「7」

平坦な声で紡がれたのは数字。

勿論、その段階で意味を理解できた人間は清澄高校麻雀部には誰一人としていなかった。

翌巡以降、青山は山から牌を引く度にそのツモツた牌を伏せると、伏せていない手牌から牌を一枚ずつ切りだし一巡目と同じく数を呟いていく。

一巡目は7、二巡目は6、三巡目は5と。巡を追うごとに青山の伏せられた手牌は多くなり、逆に口から告げられる数字は小さくなつていく。

「あつ」と最初に声が上がったのは4巡目、対面に座る竹井久からだつた。

青山の打牌を正面から見ている彼女が何かに気が付いたかのように口元に手を当てると、それに呼応するかのように外野からも声が漏れた。

……会長と眼鏡の先輩は気付いたか。

流石は上級生と内心で小さく称賛する。

けれど気付いたからと言って何かできるわけではないのもまた事実。

青山は無表情のまま引いた牌を伏せると、また一つ数字を減らした。

「3」

淀みなく続くカウントダウン。

そしてその数字が2へと変わる時には、室内にいる誰もが（一名の例外を除き）その意味を察しつつあった。彼女らに与えられた情報は毎ターン一枚ずつ伏せられていく手牌、小さくなっていく数字、そして幺九牌が一枚として存在しない河の三つ。

——牌を伏せるということは、もう変える必要がないということ。

順子や刻子といった麻雀の基本的な構成要素である筈の三枚同時ではなく、一枚ずつ伏せていく意味。

——数字が小さくなっていくということは、いずれ終わり（0）が来るということ。麻雀が指し示す終焉とは何か。

——幺九牌が一枚として河に存在しないということは、それを手牌に抱えている可能性が大きいということ。

幺九牌を使った手役で可能性があるもの。

導き出される答えは、たったの一つだった。

緊張が室内に走る。

答えに至った者は誰一人としてそれをブラフだとは考えなかった。

確率が低いだとか、常識的に有り得ないだとか、そんな「当たり前」は一切合財みな
の脳裏から消えていた。

彼なら、青山茂喜なら、魔神ならなしてしまふ。

それがこの場における共通認識。そして南三局が始まってから7巡目。青山は引いた牌を伏せると、手牌の中で唯一真つ直ぐに立っている牌を河へと置いた。

「リーチ」

曲げられる（六筒）、投げられた千点棒。

そして伏せられた十三枚の手牌。

「ポニー」

起家である咲が動いた。

どことなく焦っているようにも見えたその鳴きはもしかしたらツモ順を変えるためのものだったのかもしれないし、あるいは次順で和了するための布石だったのかもしれない。

いずれにせよ今の青山にはわからないことだった。

……まあ、わかったところで意味はないんだが。

何度ツモ順を変えられようが、どれほど流れが逆行していようが、どれだけ強力な場の支配を受けていようが関係ない。

誰も和了れずに再びツモが回ってきた時点で勝負は決している。

青山は淡々と山から牌を引くと、その凶柄を確認することなくマットへと置いた。

「ツモ」

宣言するその声には何の感情も乗ってはいなかった。

ぐるりと、裏返っていた手牌が一般的な回転とは逆向きでひっくり返る。

「国士無双 16100・8100」

他者も、能力も、流れも関係ない。

天上下唯我独尊、傍若無人。

何者も顧みず、いかなる物にも束縛されず、ただただ定められた天道を歩く。

それが王。

それが魔神。

それが青山茂喜本来の麻雀であった。

II

宮永咲 68200

青山茂喜 281200

原村和 37200

竹井久 13400

南三局が終了してすぐのこと。

手牌を倒した青山は小さく息を吐くと、卓中央のスイッチに手を伸ばすことなく席を

立った。えつと誰かが声を出す暇もなく椅子の脚に立てかけていた鞆を手に取ると、なんとそのまま出口へと向かっていくではないか。

いち早く我に帰った久が咄嗟に声をあげた。

「ちよ、ちよつと青山君！」

慌てた久の呼びかけに、青山は足を止めると顔だけを声へと向けた。

「なにか？」

「なにかつて……」

「もう勝負はつきました。続けるなら勝手にやっってください」

南三局が終了したことで事実上完全に勝負は決した。

例え次のオーラスがいかなる結果になろうとも、青山のトップが揺るぐことはない。

無論、マナーという観点から見れば途中退出は褒められたことではないが、

「気分が乗らなくなればその場で帰ってもいい……昼休み、会長はそう言いましたよね？」

「ええ」

「だったらもういいでしょ？ 結果が出た以上、俺はこれ以上打つ気はない。それに」

青山はそれまで一緒に打っていた同級生二人を一瞥し、

「会長の目的も果たせたようですし」

「あら。やつぱり気付いてたの？」

「むしろ気が付かない方がどうかしてます」

「そう。なら、今私が考えていることもわかるのかしら？」

久の問いかけに青山は答えなかった。無言のままゆっくりと身体を反転させ、凜とした眼差しと向かい合う。

「青山君。あなた、麻雀部に入らない？」

ざわりと空気が震える。

青山の眉間に皺が寄ったが、久は目を離さなかった。

「あなたが何で弱小校ですらなかったウチに来たのか、麻雀部に入らなかったのかを聞く気はないわ。でも麻雀を辞めたわけじゃないんでしょ？　なら今度の県予選はどうするつもり？」

「……勝手に個人で出場するつもりですけど」

「そう。でも麻雀部が比較的少なかった中学の時とは違って、高校の大会では部を通さないエントリーは中々大変よ？　麻雀部があるのに部外から出場しようとする場合は特にね。少しだけとお金もかかるし、保証人としての先生も見つけないといけない」

「部に入ればそんな手間はかからない。だから麻雀部に入れと？」

「ええ。それに入ったからって何も毎日来なさいとはいわないわ。流石に大会前ならそ

れなりに来てほしいけど、そうじゃなかったら気が向いた時だけで構わない。問題さえ起こさなければいつ来て、いつ帰るかも青山君の自由。もしも何か別に希望があるのなら、出来る限り応えるつもりよ」

何だったらこれまでの素行不良を見逃すよう生徒指導の先生に口添えして構わないと久は付け足す。それはたかだか一部員を勧誘するとしては余りにも破格な条件、明確な鼻肩に他ならなかった。聞いていたのどかは我慢ならないといった風に顔を赤らめ、雀卓を叩いた。

「部長っ！ それはいくらなんでもっ!？」

「黙っていてのどか」

いつになく鋭い声で久は後輩の言葉を遮った。

「あなたもわかったでしょ？ 青山君の実力は間違いなく全国でも最上位よ。唯でさえウチは伝手がなくて全国クラスの相手と打つ経験が不足している。県予選にあの龍門澗がいる以上、自分よりも強い相手と戦う経験は何より貴重よ」

「だからと言って鼻肩していいわけではっ!」

「そうね。確かにあまり褒められたことじゃないわ。多分、もし私に後があるんだつたらこんな提案はしてなかったでしょうね」

でもと、麻雀部唯一の最上級生はその右手で己の学年色の青いスカートの先をつまん

だ。

「私は三年、もう後のない三年なの。これまでの二年間は夢を持つことすらできなかつたけど、最後の年になってあなたや優希、須賀君、宮永さんっていう有望な新人が四人も入ってきて念願の団体戦に——全国優勝っていう夢を本当に見られるようになった」

「部長……」

「その夢を叶える為なら私は何だってするわ。だからのどか、今だけは私のわがままを見過ごしてちょうだい」

最後は優しく諭した久の言葉にのどかは何かを言いかけつつも、それを実際に口にすることはなかった。不承不承極まりと言った様子で、無言のまま腰を下ろす。

どこまでも生真面目な後輩に苦笑を浮かべ、久は改めて青山と向かい合った。

「話を中断してごめんなさい。それでどうかしら？」

「悪くはない話ですな」

そう、本当に悪くない。

基本的に参加は自由で大会に出場するための細かな手続きも必要ない。授業をサボる時の寝床も確保できる上、可能な限り希望は叶えるとまで言っている。

けれど、

「あまり乗り気じゃないみたいね？」

無言こそがその答えだった。久は肩を竦めると、スカートのポケットから綺麗に折りたたまれたコピー用紙を青山へと差し出した。

「明日からの二日間、この場所で合宿をするわ」

「……何でそれを俺に？」

「例え気が乗らなくてもハッキリ断らなかつたつてことは、どこか迷う部分があるつていうことでしょ？ だから家に戻つてもう一度考えてみて。宿舎がある場所はここからそんなに遠くないし、あなたも泊まれるようにしておくから入る気になったら来て頂戴」

「無駄になるかもしれないよ？」

「その時はその時よ」

そう言つて胸を張る久の姿はどこまでも潔かつた。

一瞬の逡巡の後、青山は差し出された紙を受け取る。

そして小さく頭を下げると、麻雀部を後にした。

III

麻雀部の部室がある旧校舎を出ると、青山茂喜は特にどこかに寄ることもなく真つ直

ぐ帰路へとついていた。校門から伸びる坂道を道なりに下り、日に二十本と出ないレトロな電車の通る高架下をくぐる。駅前繁華街を抜けて人気の少ないあぜ道を歩くころには、既に空は茜色から黒へと変わっていた。

そうして学校を出ておよそ三十分弱。

青山が足を止めたのは、今にも崩れ落ちそうなアパートの前だった。

来訪者を出迎えるためのプレートは風化して文字が削り取られ、二階へと続く階段は赤く錆びつき、壁面にはこれでもかと言わんばかりにびっしりと蔦やコケが張り付いている。

見るからに年季の入っていきそうなその建物はアパートというよりも廃墟という表現の方がしっくりくるが、その廃墟こそが今の青山の宿だった。

ギシギシと音を鳴らす階段を上がり、一步足を出す度に嫌な音のする金属の廊下を無遠慮に歩く。住人のいない扉を四つばかり横切った先にある突き当りの部屋が青山に割り当てられていた場所だった。

ガチャリと、立てつけの悪い薄い金属の扉を開ける。

鍵はかかっている。というより、鍵穴自体が錆びているためにかけたくてもかからないというのが正解だった。

靴を脱ぎ、畳へと上がって電気をつける。

LEDなどと洒落たものではない、裸電球の刺々しい光が殺風景な部屋を照らし出す。

安っぽい布団と元から備え付けであつたらしい洋服棚。置いてあるのはたつたそれだけで、僅か8畳のワンルームだというのに室内には随分とスペースが残っていた。

青山は持つていた鞆を適当に放ると、敷布団へと倒れ込んだ。

……麻雀部か。

懐かしい響きだつた。

体を転がして仰向けになると、強すぎる光が目に入った。

……しがらみを断つためにこつちに来たつもりだつたんだがな。

だが昨晚、宮永咲と出会つた時に——いや、そもそもこの長野という地を選んだ段階でこうなることは最初から決まっていたのかもしれない。

首を動かし、洋服棚の上へと目を向ける。

そこに置かれたのは二つの写真立て。

一つは、今から一年ほど前に撮つた時の物。

デジカメで撮つた写真の中には、そつぽを向きながらもどことなく穏やかな表情をした青山とそれに寄り添う二人の少女の姿がクッキリと映っていた。

……向き合えつてことか。

かつての絆と。

平凡ながらも温かかった記憶と。

捨てようとしても捨てきれなかった過去と。

青山は視線をもう一つの写真立てへと移す。

そこに入っていた写真はもう一枚とは違って随分と古びていた。

粗い画面の中にはトラ柄のシャツを着た白髪の老人と、その傍で満面の笑顔を浮かべる幼き日の青山がいた。

……アカギさん。



清澄高校は公立校にしては珍しく、私有の合宿施設がある。

もともとは旅館だったものを閉館する際に市が安く買い取ったもので、いささか学校から距離があるものは旅館だけあって施設はしっかりとし、天然の温泉まで付いていた。

学生には過ぎたるその施設に清澄高校麻雀部が着いたのは、ちようどお昼を回った頃だった。合宿所の一階にある大食堂にて部員全員で食事をとった後、食後すぐに練習を始めるのもなんだしという久の一言で一時間ばかりの自由時間が設けられることになった。

初めて合宿所を訪れた一年生達は興味津々とばかりに合宿所を探検する一方、上級生組二人は部屋に備え付であった浴衣に着替えてまったりとロビーのソファで寛いでいた。

「しっかし、本当にくるのかのお?」

近隣の名産である梅茶の入った湯呑みから口を離し、染谷まこが呟く。

それが独り言ではなく自分に向けられたものだど気付いた久は、読んでいた雑誌から顔を上げた。

「あら? まこは来ないと思ってるの?」

「どうも乗り気やなかったようじゃからの。そういうあんたはどう思つとるんじゃ?」

「来るわよ、青山君は。必ずここにね」

「それは勘かの?」

「勘よ」

「何でそう自信満々なのか一度知りたいものじゃ」

まこが呆れを含ませた息を吐いた時だった。

外へと続く自動ドアが開いたのは。ロビーへと入ってきた来訪者の顔を確認すると、久は目を見開くまこへ悪戯っぽい笑みを投げかけた。

「ほらね?」

「……もうなにも言わん」

コツコツと床を鳴らし、来訪者は久の元へと歩み寄る。

泊まりだというのに小さな鞆一つしか持たないその身軽な姿に苦笑しつつ、久は立ち上がって後輩と目を合わせた。

「ここに来たつてことは、そういうことでもいいのよね？」

「まあ、気が向いている間だけですけど」

今はそれで構わないわと、久は腕を差し出した。

「ようこそ麻雀部へ。青山茂喜君」

「……お世話になります」

差し出された手を、青山茂喜は確かに握った。